

# 西平内I遺跡ハンドボーリング調査報告書

配石、集石遺構の地中確認調査

2019. 3

岩手県洋野町教育委員会

# 例 言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡洋野町種市第37地割地内に所在する西平内 I 遺跡のハンドボーリング調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡のハンドボーリング調査は、国庫補助金を導入して実施した。
3. 本遺跡の岩手県遺跡台帳の遺跡番号はIF48-0041である。
4. 調査主体者 洋野町教育委員会  
担当者 千田政博
5. 調査指導 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化課（現生涯学習文化財課）
6. 調査用の基準点測量については、次の機関に委託した。  
株式会社ダイヤ（久慈市）
7. 自然科学分析については、下記の機関に委託した。  
パリノ・サーヴェイ株式会社（東京都）
8. 依頼原稿について執筆者の氏名は、文頭に記載してある。
9. 第Ⅲ章を除き本報告書の執筆・編集・構成は千田政博が担当した。
10. 野外調査、資料収集及び本報告書の作成等に際して下記の機関・方々からご指導、ご助言、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（五十音順、敬称略）  
青森県埋蔵文化財調査センター、青森市教育委員会、安中市教育委員会、一戸町教育委員会、大桑村教育委員会、小樽市教育委員会、鹿角市教育委員会、北秋田市教育委員会、田野畑村教育委員会、南部町教育委員会、函館市教育委員会、平川市教育委員会、弘前市教育委員会、藤岡市教育委員会、公益財団法人北海道埋蔵文化財センター、森町教育委員会、八雲町教育委員会、赤坂朋美、安達尊伸、井上雅孝、岩井浩介、榎本剛治、菅野紀子、君島武史、熊谷賢、熊谷常正、児玉大成、小林克、斉藤慶吏、佐々木清文、佐藤智雄、高木晃、高橋毅、滝本学、中村明央、中村哲也、野田尚志、濱田宏、福島正和、藤井安正、藤本昌子、布施和洋、古屋敷則雄、松山力、八木勝枝
11. ハンドボーリング調査作業においては、次の方々にご協力をいただいた。（五十音順、敬称略）  
一郷勝、大下良子、金澤ユウ子、下町安夫、高屋敷公男、田高石太郎、館野カツエ、館野孝子、館野隆、長根山一、信田義朋、塚野忠男、庭瀬チサ子、庭瀬麗子、畑中ヨシエ
12. 室内整理、報告書作成にあたって、次の方々にご協力をいただいた。（五十音順、敬称略）  
小坂恵、佐藤美津子、村田千鶴
13. 第1図は、国土地理院発行の25,000分の1の地形図、第3図は、50,000分の1の洋野町管内図を複写して使用した。
14. 第2図・4図・5図・7～9図、及び付編 西平内 I 遺跡の自然科学分析の図1は、国土交通省が作成した地形図を提供していただいた。
15. 第4図及び第7～9図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。
16. 写真図版のうち、遺跡近景の空中写真は、岩手県土整備部河川課より提供していただいた。
17. 写真図版のうち、調査区近景の空中写真は、エイト技術株式会社（八戸市）より提供していただいた。
18. 地中の礫の座標点測量は、株式会社CUBICの「遺構実測支援システム（遺構くん）」を用いて行った。
19. 調査で得られた諸記録等については、洋野町教育委員会で保管、管理している。
20. 引用・参考文献については文末に収めた。

# 目 次

例 言  
目 次

## 本 文

I. 遺跡の概要	3
II. 洋野町内の遺跡	3
III. 遺跡の地形と地質	19
IV. ハンドボーリング調査の概要と成果	26
付編 西平内 I 遺跡の自然科学分析	35
写真図版	51
報告書抄録	54

## 表

第 1 表 町内の遺跡一覧 (1)	10	第 1 表 町内の遺跡一覧 (5)	14
第 1 表 町内の遺跡一覧 (2)	11	第 2 表 岩手県北東部地域の段丘 (面) と対比	21
第 1 表 町内の遺跡一覧 (3)	12	第 3 表 十和田火山の新时期活動と 十和田湖の変遷	24
第 1 表 町内の遺跡一覧 (4)	13		

## 図 版

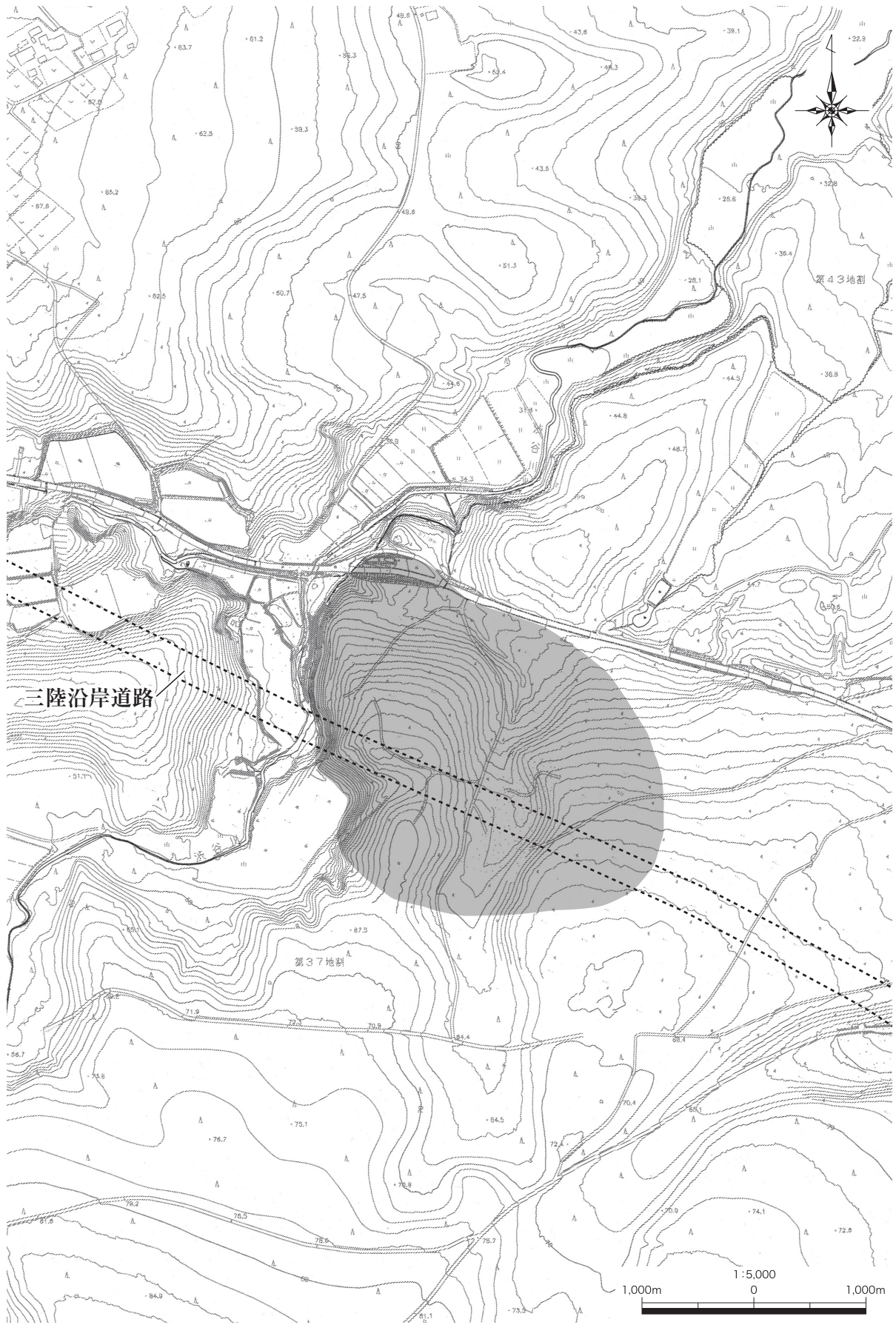
第 1 図 遺跡位置図	1	第 7 図 ハンドボーリング調査成果図	28
第 2 図 遺跡範囲図	2	第 8 図 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 発掘調査遺構配置図とハンドボーリング 調査成果図の合成	29
第 3 図 町内の遺跡位置図	9	第 9 図 第 8 図の拡大	31
第 4 図 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 発掘調査遺構配置図	15		
第 5 図 調査区周辺の地形図	17		
第 6 図 遺跡周辺の地形区分図	19		

## 写 真 図 版

写真図版 1 遺跡遠景・近景	52
写真図版 2 調査区近景他	53



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡範囲図

## I. 遺跡の概要

西平内 I 遺跡は太平洋岸から西へ 1.9km、青森県境から南東へ 1.3km の北向きの丘陵上に位置する。遺跡の西側から北側に向かい渋谷川が流れる。標高は 61.4m ～ 63.2m である。平成 16 年度（2004）に、旧種市町教育委員会による町内遺跡詳細分布調査により発見された遺跡である。縄文時代後期の土器や打製石斧、剥片が採集されている。遺跡から東に 300m のところに平内 II 遺跡が所在し、本遺跡と同時期の土器が出土している。また、北西 200m には伝吉 I 遺跡、西へ 300m のところに北ノ沢 I 遺跡が所在する。

本遺跡は、一般国道 45 号線三陸沿岸道路事業（洋野～階上）に伴い、公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下岩文振埋文に略称する）により、平成 26 年度（2014）及び平成 27 年度（2015）に発掘調査が実施された遺跡である。

発掘調査の結果、集石遺構が 62 基、弧状の石列が 1 基、整地層 2 枚の他、竪穴住居跡 5 棟、竪穴状遺構 1 棟、掘立柱建物跡 5 棟、陥し穴状遺構 16 基、土坑 37 基、焼土遺構 14 基、炉跡 10 基、埋設土器 4 基、柱穴 10 個が検出された。遺物は縄文土器、弥生土器、石器、土製品、石製品が出土している。縄文土器は後期初頭～前葉のものが主体を占めている。

その後、平成 28 年度（2016）に洋野町教育委員会のハンドボーリング調査が行われ、同遺跡は平成 30 年度（2018）に町指定史跡に指定された。

## II. 洋野町内の遺跡

洋野町内に所在する遺跡は、平成 30 年（2018）4 月現在、岩手県遺跡台帳に 218 遺跡が登録されている。前回刊行した発掘調査報告書（平成 28 年度（2017））では登録が 207 箇所であったが、三陸沿岸道路建設に伴う試掘調査等により増加した。

町内遺跡詳細分布調査は、旧種市町が行った平成 16 年度（2004）の角の浜・伝吉・平内・麦沢（姥沢）地区の分布調査のみである。町内遺跡詳細分布調査の調査計画では町内を 6 地区に分けて実施する計画であったが、調査はそのうちの 1 地区しか実施されておらずほとんどが未調査である。旧大野村分についても実施しておらず、町内には未発見の遺跡が多く所在するものと想定される。なお、旧種市町分については、岩手大学草間俊一教授により昭和 30 年（1955）から昭和 36 年（1961）にかけて遺跡の踏査と発掘調査が行われ、昭和 38 年（1963）に「種市の歴史（原始～中世）種市町諸遺跡の調査報告」として種市町役場から刊行されている。平成 26 年度（2014）から開始された三陸沿岸道路建設に伴う発掘調査により調査事例が増加したものの、町内に所在する遺跡の様相については不明な部分が多い。

旧石器時代の遺跡の登録はないが、「角川日本地名大辞典 3」によると、旧石器遺物出土遺跡として鉄山遺跡（大谷鉄山か？）、有家遺跡（上のマッカ遺跡か？）が紹介されている。和座川上流の海岸段丘上に立地する鉄山遺跡から石刃・剥片・敲石が出土、海岸段丘上に立地する有家遺跡から石斧・剥片が出土し、いずれも高館火山層最上部から発見されたとある。しかし、遺跡の名称は現在登録されているものに該当せず、詳細は不明である。

縄文時代の遺跡数は、全体の 7 割以上を占める。草創期の遺跡は現在のところ登録はないが、洋野町境から 3km の青森県三戸郡階上町大字平内にある滝端遺跡では爪形文土器が出土している。また、階上町に隣接する八戸市南郷区黄檗遺跡、洋野町に隣接する軽米町馬場野 II 遺跡でも草創期の土器が出土していることから、町内からも出土する可能性がある。

早期の遺跡として、ゴツソー遺跡（20）、大宮 II 遺跡（47）、大宮 I 遺跡（48）、宿戸遺跡（199）、中野城内遺跡（203）などがある。大宮遺跡は、昭和 36 年（1961）に草間教授により発掘された遺跡で、A・B・C の 3 地区

に分けて調査が行われ報告されている。A・B遺跡からは貝殻文土器が出土しており、特にB遺跡からは胴部に貝殻条痕、口唇部に貝殻腹縁文の尖底土器が出土している。草間教授は、岩手県で初めて復元された貝殻文の尖底土器であり、発見されたことは多大な成果であると報告している。ゴッソー遺跡では岩文振埋文による平成6年度(1994)の発掘調査で、遺構には伴わないが日計式土器、魚骨回転文土器、寺の沢式土器等が出土している。中野城内遺跡は、三陸沿岸道路建設事業に伴い、岩文振埋文により平成29年度(2017)に調査が行われた。調査の結果、早期とみられる土坑、白浜式土器が出土している。

前期の遺跡として、ゴッソー遺跡(20)、上のマッカ遺跡(43)、北ノ沢I遺跡(163)、小田ノ沢遺跡(200)などがある。ゴッソー遺跡は早期～晩期の縄文土器が出土しているが、前期初頭の遺物量が多く、特に平成6年度(1994)の岩文振埋文による本発掘調査で出土したコンパス文土器や押型文土器は岩手県で初めての出土と考えられる。同遺跡もやはり昭和36年(1961)に草間教授により発掘された遺跡で、縄文時代前期の土器を中心に縄文時代早期の土器、弥生時代の土器、土師器片、石器を採取したとの報告がある。なお、上のマッカ遺跡は昭和36年(1961)草間教授の調査により、貝塚が存在する可能性が指摘されている。

中期の遺跡として、千敷平遺跡(4)、ゴッソー遺跡(20)上のマッカ遺跡(43)、北ノ沢I遺跡(163)などがある。平成27年度(2015)洋野町教育委員会によるゴッソー遺跡の本発掘調査では、中期初頭の竪穴住居跡が1棟発見され、三重の入れ子にした土器埋設炉と単体の土器埋設炉が並列した状態で検出された。その入れ子の土器埋設炉の中からヒエの胚乳が検出された。

後期の遺跡として、平内II遺跡(65)、上水沢II遺跡(92)、西平内I遺跡(185)、南川尻遺跡(194)、サンニヤI遺跡(195)、北鹿糠遺跡(196)、下向遺跡(202)、サンニヤIII遺跡(218)などがある。町内の縄文時代の遺跡で、後期前葉に位置付けられる遺跡が一番多く、その中でも溝状土坑(陥し穴状遺構)と遺構外から後期前葉の土器が出土する遺跡が多数を占める。平内II遺跡は洋野町教育委員会により、平成11年度(1999)から平成25年度(2013)の間、延べ6カ年発掘調査が行われた。屋外炉、集石、焼土遺構、溝状土坑が検出されており、出土した土器は主に後期前葉に位置付けられるものである。上水沢II遺跡は平成12年度(2000)に岩文振埋文により本発掘調査が行われ、後期前葉から後葉の竪穴住居跡が11棟発見された。

なお、三陸沿岸道路建設事業に伴い発掘調査が行われた遺跡で、後期に属する竪穴住居跡が検出された遺跡は、西平内I遺跡(185)、南川尻遺跡(194)、サンニヤI遺跡(195)、北鹿糠遺跡(196)、南鹿糠I遺跡(206)があり、南川尻遺跡は後葉、それ以外は前葉のものである。

晩期の遺跡として、たけの子遺跡(21)、大平遺跡(32)、ニサクドウ遺跡(58)、戸類家遺跡(61)、田ノ沢遺跡(63)などがある。特にたけの子遺跡は町内で晩期を代表する遺跡である。昭和36年度岩手県遺跡台帳作成調査において、戦争中開墾の際多数の土器が出土し、現在は植林されており包含層は良好で重要な遺跡であるとの報告がある。洋野町立種市歴史民俗資料館収蔵の考古資料の多くはこの遺跡からの出土である。戸類家遺跡は昭和32年(1957)に慶応大学江坂輝彌氏により発掘調査が行われており、土器、石器の他に土偶が出土している。この時の土偶は現在慶応義塾大学考古学研究室に収蔵されている。また、昭和7年(1932)には岩手県史跡名勝天然記念物調査会委員であった小田島禄郎氏が同町を訪れており、その時に採集された田ノ沢遺跡、八木貝塚の出土遺物が岩手県立博物館に収蔵されている。

なお、貝塚遺跡としてホックリ貝塚(33)、八木貝塚(37)、小子内貝塚(40)、黒マッカ貝塚(41)がある。ホックリ貝塚からは岩手県で初めて縄文時代の製塩土器が出土しており、久慈市の大芦I遺跡で平成9年(1997)に発見されるまで、製塩土器が発見された県内唯一の遺跡であった。海岸付近に位置する同貝塚は、昭和24年(1949)に行われた造船所の建設工事によりほぼ壊滅したとみられ、製塩遺跡であった可能性がある。洋野町の故玉沢重作氏により製塩土器が発見され、その後岡山大学名誉教授近藤義郎氏が、芹沢長介氏、伊東信雄氏、江坂輝彌氏から情報を得て昭和35年(1960)同遺跡を調査し、土器の検討を行っている。このほか縄文時代の製塩土器は、ゴッ

ソー遺跡の平成12年度(2000)岩文振埋文による本発掘調査でコンテナ1箱分出土している。洋野町立種市歴史民俗資料館には、たけの子遺跡で採取された縄文時代の製塩土器片が多数収蔵されている。また、平成16年度(2004)の種市町内遺跡詳細分布調査において、南平内I遺跡(182)より製塩土器片が晩期の縄文土器とともに発見された。同遺跡は現在の汀線まで約150mの距離であるが、時代によっては汀線付近であった可能性もある。遺跡の残存状況も良くないため詳細は不明であるが、位置から推測すると製塩を行った遺跡であることも考えられる。

弥生時代の遺跡として、大平遺跡(32)、大宮II遺跡(47)、大宮I遺跡(48)、平内II遺跡(65)、上水沢II遺跡(92)などがある。先述した平内II遺跡では、平成25年度の調査で弥生時代前期後葉の竪穴住居跡が2棟検出されている。上水沢II遺跡では弥生時代後期の竪穴住居跡が1棟検出され、土器がコンテナ約1箱分出土している。なお、西平内I遺跡では、沈線間に交互刺突文を有する弥生時代後期の土器片が出土している。

古墳時代の遺跡については集落遺跡の確認はないが、袖山遺跡(38)において、剣形の石製模造品が表面採集されている。同品もまた故玉沢重作氏により発見されたもので、長さ4.2cm、最大幅1.5cm、厚さは最大で4mm、重さは3.6g、石材は北上山地が産出地の蛇紋岩で、色調は暗緑灰色である。茎の表現が簡略化された二等辺三角形に三角形を付加した形状で、全体が丁寧に研磨されて、頭部には垂下孔とみられる径2mmの穿孔があり、表面は鑄が表現されている。形状から5世紀後葉より古い可能性がある。袖山遺跡は標高約50mの海岸段丘上に立地し、現状は山林などで、主な時代は縄文時代であるが、石製模造品の他には当該期の遺物は発見されていない。昭和28年(1953)に東北大学伊東信雄教授が東北地方の石製模造品の集成を行い発表した「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」により同品が紹介され知られるようになった。この石製模造品も岩手県で初めて発見されたもので、昭和58年(1983)に一戸町馬場平遺跡から剣形の石製模造品が発見されるまで県内唯一のものであった。

奈良・平安時代の遺跡として、城内遺跡(11)、ニサクドウ遺跡(58)、八森遺跡(73)、サンニヤII遺跡(205)、南鹿糠I遺跡(206)などがある。サンニヤII遺跡では、三陸沿岸道路事業に伴い平成26年度(2014)・27年度(2015)の岩手県教育委員会による発掘調査で、8世紀後半から9世紀前半の時期の竪穴住居跡が3棟検出されている。また、国道45号線種市登坂車線整備事業に伴い、岩文振埋文により平成28年度(2016)に調査が行われた、八森遺跡でも8世紀代の竪穴住居跡が1棟検出されている。城内遺跡からは8世紀代と考えられる土師器の長胴甕、球胴甕、甗、土師器坏が出土している。なお、草間教授の報告書によるとニサクドウ遺跡で土製支脚、土師器坏が出土している。

二十一平遺跡(69)では古代(平安時代)の製塩土器が出土している。同遺跡は岩手県と青森県境を流れる二十一川の南側の汀線付近に位置する。海岸整地に伴う重機の掘削により遺跡の存在が明らかになり、平成15年度(2003)に新規登録された。製塩土器片、土製支脚片が多量に散布し、被熱したような円礫もみられた。現在までにコンテナで約5箱分が採取されている。遺跡の立地、発見された遺物の状況から製塩を行った可能性が高いが、保存状況は重機の掘削により一部破壊されていると考えられる。また、未登録の遺跡ではあるが、駒木野智寛氏、相原淳一氏による古津波堆積層の調査に伴い海岸付近で採集されている製塩土器もある。なお、古代の製塩土器は海岸から6.2kmの館野遺跡(207)でも採集されており、町内には縄文時代や古代の製塩土器、土製支脚を伴う遺跡が多く所在することが予想され、製塩遺跡の発見や製塩土器の資料の増加が見込まれる。

中世の遺跡として中世城館跡の分布調査が昭和59年(1984)に岩手県教育委員会により行われており、岩手県遺跡台帳には28遺跡が登録されているが、ほとんどが城主などの詳細が不明である。

種市の城内地区には種市氏の居城である種市城跡が所在する。種市氏は中世～近世初期に当地方を領有していた三戸南部氏(後の盛岡南部氏)の家臣である。『南部藩参考諸家系図』(以後系図)によれば、種市中務(実名不詳)が三戸南部氏24代晴政から種市村、蛇口村(軽米町)ならびに傍村賜り種市村に居住したとある。およ



そ16世紀半ば頃と推測されるが、それ以前のことは不明である。『奥南旧指録』には、三戸南部氏25代晴継の股肱の臣として中務が久慈備前らと名を連ねており、三戸南部氏の有力家臣であったとみられる。系図によると、種市中務の長男光徳は同じく中務と称した。光徳は三戸南部氏26代信直（初代盛岡藩主）から種市村ならびに傍村に600石を賜ったとある。『聞老遺事』によると、天正19年（1591）九戸政実の乱の際、信直方に属し18人の部下と鉄砲三挺、弓三張で参陣している。また、2代盛岡藩主利直の時に起きた慶長5年（1600）の岩崎合戦では、部下18人と参陣している。なお、系図には光徳の妻は根城南部氏（後の遠野南部氏）18代八戸政栄の弟新田政盛の娘であることが記されている。

その後光徳の長男孫三郎が家督を継いだ。『聞老遺事』によれば大阪の夏の陣に出陣している。光徳と孫三郎父子は、初代盛岡藩主信直、2代盛岡藩主利直父子に仕え活躍した家臣であったが、孫三郎は3代盛岡藩主重直の時、罪ありということで禄を没収され、慶安2年（1649）に没している。

光徳の次男吉広は系図によれば、天正15年（1587）に初代盛岡藩主信直から閉伊口村（久慈市）を賜り住んでいたが、天正17年（1589）に蛇口村に替地を賜り、蛇口氏に姓を変えている。

岩手県遺跡台帳には、平時居住していた平城の種市城跡（16）と非常時に立てこもったとされる山城の種市城跡（17）が登録されている。平城の種市城跡はJR八戸線種市駅より西へ約9kmに所在し、平城跡は現在でも馬場屋敷、的場、神楽屋敷など当時の名残と思われる地名が存在する。そこから南西へ約1kmに山城の種市城跡が位置する。

天正18年（1590）、豊臣秀吉の朱印状により初代盛岡藩主信直が「南部内七郡」を安堵されると、八戸・九戸地方一帯は信直が直接支配することとなり、寛永4年（1627）に根城南部氏が伊達氏に対する備えを理由に遠野へ転封されると盛岡藩の直轄地になった。八戸には八戸城代が配置され、さらに八戸地方には八戸代官、九戸郡には久慈代官を派遣し支配にあたったようである。

寛文4年（1664）9月、3代盛岡藩主重直が跡継ぎを決めないままに死去した。同年11月、幕府は重直の次弟の重信と末弟の直房を呼び、盛岡藩10万石のうち8万石を重信に相続させ、残り2万石を直房に与え、新規に一藩をおこさせる処置を取った。寛文5年（1665）2月、盛岡藩より領地の配分が行われ、八戸を居城とし、三戸郡41カ村、九戸郡38カ村、志和郡4カ村、都合83カ村が付与された。八戸藩は、各村の支配のため通制という行政区域を用い、三戸郡には八戸廻・名久井通・長苗代通、九戸郡には軽米通・久慈通、志和郡には志和の行政区を設定し、各通には代官所を配置した。種市は八戸廻、大野は久慈通に属していた。

八戸藩の主な産業は、商業、林業、漁業、製塩業、鉄産業、造船業などがあり、特に製鉄業は原料である砂鉄と燃料の薪炭材が豊富であったため盛んに行われた。製鉄に関する史料は八戸藩の藩庁の日記である目付所日記、勘定所日記、民間の史料では晴山家文書、淵沢家文書、西町屋（石橋）文書などがあり、様相を知ることができる。

製鉄の中心地は大野で、鉄山会所として日払所がおかれ、鉄山支配人が詰めて生産方を指揮した。天保9年（1838）には、大野の鉄山として玉川山、金取山、葛柄山、水沢山、大谷山、川井山、滝山の七山があった。晴山家文書の天保8年（1837）「寛政年中より拾書」は鉄山支配人の経緯が記されているが、晴山文史郎から安永7年（1778）に初代晴山吉三郎へ受け継がれ、その後数人の支配人を経て、享和2年（1802）からは飛驒の浜谷（屋）茂八郎が引き継いだ。そして、文政6年（1823）には、鉄山は藩営となり、石橋徳右衛門が支配人に就任して、その下支配人に二代目晴山吉三郎が就いた。さらに天保5年（1834）の百姓一揆後は、軽米の淵沢円右衛門が支配人を命じられ、天保9年（1838）からは江戸の美濃屋宗（惣）三郎（家臣名金子丈右衛門）へと移った経過が記されている。

近世の遺跡として町指定史跡の有家台場（46）がある。目付所日記によると、八戸藩では幕府から異国船警戒の命を受けて、寛政3年（1791）に鉄砲堅・目付御用掛を任命し、異国船の警戒に当たさせたようである。寛政5年（1793）の中里覚右衛門書き上げの「堅場」には「大堅」として鮫村、麦生、「小堅」として八太郎浦、湊浦、

小船渡浦、有家浦、中野浦の名があげられている。藩の日記などには異国船の出没記録がいくつかあるが、目付所日記によると文政8年（1825）有家浦の沖合15里に異国船一隻が近寄り、伝馬船二隻を出して上陸の様子をみせたので、弓・鉄砲衆など計34人の藩士が同日に派遣されたことが記されている。その後、安政元年（1854）八太郎・湊場尻・館鼻・塩越・鮫・小船渡・有家・久慈湊に台場が築かれ、有家にも陣屋堅の役人が任命された。有家台場跡の現況は、八戸線の建設工事などで破壊されているものの、保存状況は概ね良好で、盛土遺構の一部が残存している。

当町の特徴を示す製鉄関連の遺跡は、21カ所（旧種市町16カ所、旧大野村5カ所）登録されている。先述した七山の一つである大谷鉄山（26）は大谷地区にあり、鉄山操業により形成された集落とみられ、製鉄に関わった人々の子孫が多く居住している。製鉄関連の遺跡調査については、岩手県教育委員会の製鉄関連遺跡の詳細分布調査において、旧種市町5カ所、旧大野村35カ所の遺跡の所在を確認している。また、元野田村教育長、田村栄一郎氏によるたたら遺跡の踏査によると、旧種市町は鉄山跡12カ所の他、密銭場跡や鍛冶場跡など15カ所、旧大野村は42カ所と鍛冶場跡の調査結果報告（1987『みちのくの砂鉄いまいずこ』）がある。鉄滓が採集される遺跡が少なくとも60カ所以上にのぼり、未発見のものも含めると相当数になると考えられる。

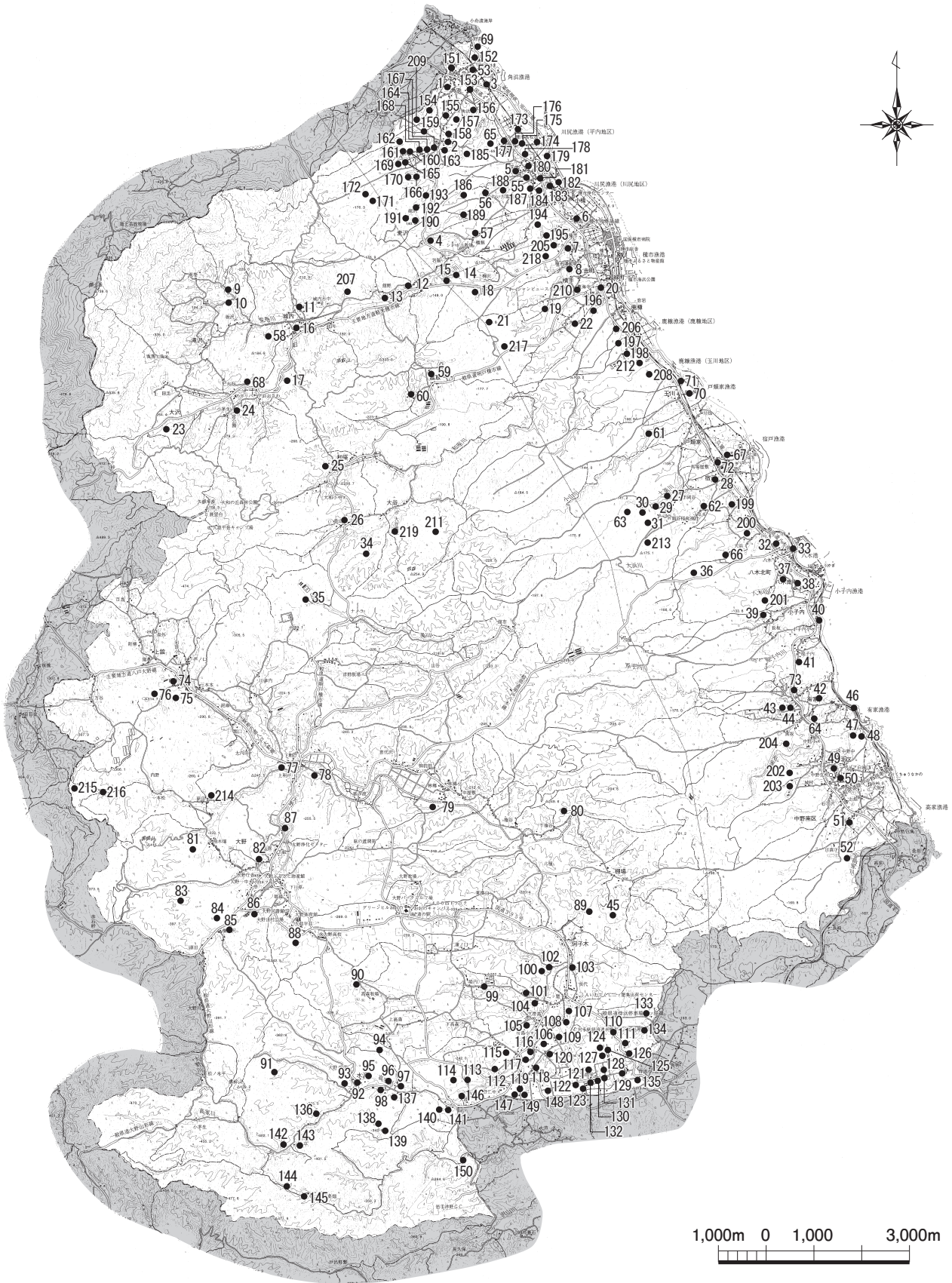
なお、三陸沿岸道路建設事業に伴う発掘調査において南八木遺跡（201）で古代～中世の製鉄関連の遺跡が発見された。少なからず近世以前のものも所在することが予想されるが、町内の製鉄関連遺跡を踏査された佐々木清文氏によると、ほとんどが近世のもので、それ以前のもは所在しても少数であろうとのご教示をいただいている。今後製鉄関連の詳細な町内全域の分布調査を行い、製鉄関連遺跡分布図の作成、遺跡の登録作業が必要である。

製鉄以外の金・銀・銅・鉛鉱山のいわゆる非鉄鉱業については、八戸藩の日記類に僅かにみられるが、盛岡藩領に比べ八戸藩領内には大きな金山はなく、小規模な金山がいくつかあるのみのものである。梅内家文書の慶安2年（1649）の「砂金採取運上金請取状」によると、沢尻、雪畑、小手沢、野そうけ山に金山があったことが記されている。岩手県遺跡台帳には金山跡として、小手野沢金山（14）、ノソウケ金山（23）の2遺跡が登録されている。

#### <引用・参考文献>

- 草間俊一 1963 『種市の歴史（原始～中世）種市町諸遺跡の調査報告』種市町役場  
角川書店 1985 『角川 日本地名大辞典3 岩手県』  
田村栄一郎 1987 『みちのくの砂鉄いまいずこ』  
伊東信雄 1953 「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」『歴史第6輯』東北史学会  
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集  
(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集  
岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所・(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
2002『上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集  
(公財)岩手県文化振興事業団 2015『平成26年度発掘調査報告書 南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋Ⅱ遺跡 沼袋Ⅲ遺跡  
八幡沖遺跡 ほか調査概報(39遺跡)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集  
(公財)岩手県文化振興事業団 2016『平成27年度発掘調査報告書 サンニヤ遺跡 房の沢Ⅰ遺跡 白石遺跡  
ほか調査概報(33遺跡)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集  
国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団 2017『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集  
(公財)岩手県文化振興事業団 2017『平成28年度発掘調査報告書 岩洞Ⅰ遺跡・柗洞Ⅳ遺跡・八森遺跡  
ほか調査概報(28遺跡)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集  
国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財)岩手県文化振興事業団 2018『北鹿糠遺跡発掘調査報告書』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第686集

- 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団 2018 『サンニヤ I 遺跡発掘調査報告書』  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 687 集
- (公財) 岩手県文化振興事業団 2018 『平成 29 年度発掘調査報告書 岩洞湖 I・H 遺跡 和野新墾神社遺跡 北野Ⅻ遺跡  
 木戸場遺跡 中野城内遺跡 沼里遺跡 根井沢穴田Ⅳ遺跡 耳取 I 遺跡 千厩城遺跡 ほか調査概報 (23 遺跡)』  
 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 692 集
- 岩手県教育委員会 1986 『岩手県中世城館分布調査報告書』 岩手県文化財調査報告書第 82 集
- 岩手県教育委員会 1998 『岩手の貝塚』 岩手県文化財調査報告書第 102 集
- 岩手県教育委員会 2006 『岩手の製鉄遺跡』 岩手県文化財調査報告書第 122 集
- 岩手県教育委員会 平成 28 年 3 月 『岩手県内遺跡発掘調査報告書 (平成 26 年度 復興関係)』  
 岩手県文化財調査報告書第 146 集
- 岩手県教育委員会 平成 29 年 3 月 『岩手県内遺跡発掘調査報告書 (平成 27 年度 復興関係)』  
 岩手県文化財調査報告書第 149 集
- 岩手県教育委員会 平成 30 年 3 月 『岩手県内遺跡発掘調査報告書 (平成 28 年度 復興関係)』  
 岩手県文化財調査報告書第 152 集
- 岩手県種市町教育委員会 2004 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 種市町埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 岩手県種市町教育委員会 2005 『種市町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』 種市町埋蔵文化財調査報告書第 2 集
- 岩手県洋野町教育委員会 2013 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 岩手県洋野町教育委員会 2015 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第 2 集
- 岩手県洋野町教育委員会 2017 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第 3 集
- 洋野町 2006 『種市町史第六巻通史編 (上)』 種市町史編さん委員会
- 大野村 2006 『大野村誌第二巻史料編 1』 大野村誌編さん委員会



第3図 町内の遺跡位置図

No.	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺構・遺物	備考
1	IF37-1386	角浜	かどのほま	種市第42地割	縄文	散布地	縄文土器	別記※2、範囲変更(平成23年度)
2	IF37-2396	伝吉I	でんきちいち	種市第43地割	縄文、古代	散布地	縄文土器(早・前・後期)、剥片石器、礫石器、土師器等	別記※2、伝吉遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)範囲変更(平成25年度)
3	IF38-1086	角川II	かどかわめいち	種市第39地割	縄文	散布地	縄文土器(前・中・晩期)、石斧、敲石、礫器	別記※2、蝦夷森(アイヌ森)遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)
4	IF47-2334	千敷平	せんじきだいら	種市第48地割	縄文	集落跡	縄文土器(前・中・晩期)、石棒、剥片	
5	IF48-0170	平内I	ひらないいち	種市第34地割	縄文	散布地	縄文土器(前・中期)、剥片	別記※2、平内遺跡から名称・範囲変更(平成23年度)
6	IF48-1276	南館	みなみだて	種市第28地割	中世	城館跡	堀跡(破壊)	昭和59年度調査
7	IF48-2234	横手	よこて	種市第24地割	縄文、古代	散布地	縄文土器(晩期)、土師器	範囲変更(平成23年度)
8	IF48-2283	トナの木	とちのき	種市第21地割	縄文	散布地	縄文土器(後・晩期)	
9	IF56-0330	荒巻	あらかまき	種市第59地割	縄文、弥生	集落跡	縄文土器(中期)、弥生土器	
10	IF56-0370	八幡堂館(八幡蝦夷館)	はちまんどうだて	種市第61地割	中世	城館跡	単郭、堀跡	昭和59年度調査、八幡館より名称変更(平成13年度)
11	IF57-0086	城内	じょうない	種市第56地割	縄文、古代	集落跡	土師器長胴甕、土師器壺	
12	IF57-0229	荒屋敷館(蝦夷館)	あらかやしきだて	種市第50地割	中世	城館跡	堀跡(破壊)	昭和59年度調査
13	IF57-0264	館野館	たてのだて	種市第50地割	中世	城館跡	単郭、堀跡、竪穴	昭和59年度調査
14	IF57-0309	小手野沢金山	こてのさわきんざん	種市第51地割	近世	砂金採取跡	石垣	小手野山金山より名称変更(平成13年度)
15	IF57-0317	土橋館	どばしだて	種市第51地割	中世	城館跡	屋敷跡、採掘跡	昭和59年度調査
16	IF57-1023	種市城(平城)	たねいちじょう	種市第60地割	中世	城館跡	堀跡	昭和59年度調査
17	IF57-2033	種市城(山城)	たねいちじょう	種市第60地割	中世	城館跡	堀跡、平場	
18	IF58-0034	小手野沢館	こてのさわだて	種市第51地割	中世	城館跡	堀跡、平場	昭和59年度調査
19	IF58-0169	板橋館	いたばしだて	種市第21地割	中世	城館跡	単郭、堀跡	昭和59年度調査
20	IF58-0341	ゴッソー	ごっそー	種市第18地割	縄文	集落跡、狩猟場跡	竪穴住居跡、陥し穴状遺構、焼土遺構、柱穴状小土坑、土坑、縄文土器(早～晩期)、製塩土器、弥生土器、石器	別記※5・※6、平成6年度・平成12年度・平成27年度本発掘調査
21	IF58-1006	たけの子	たけのこ	種市第21地割	縄文	散布地	縄文土器(後・晩期)、製塩土器	
22	IF58-1205	大久保	おおくぼ	種市第19地割	縄文、古代	散布地	縄文土器(前・後・晩期)、石斧、土師器	
23	IF66-0156	ノウケ金山	のうけきんざん	種市第70地割	近世	砂金採取跡	石垣	
24	IF66-0300	小茅生館(タテッコ)	こまようだて	種市第70地割	中世	城館跡		昭和59年度調査
25	IF67-1131	和座館	わざだて	種市第71地割	中世	城館跡	単郭、堀跡、平場	昭和59年度調査
26	IF67-2146	大谷鉄山	おおやてつざん	種市第73地割	近世	製鉄関連	鉄滓	八戸藩大野村鉄山
27	IF69-1094	西の館	にしのだて	種市第8地割	縄文、中世	散布地、城館跡	縄文土器(後期)、石器、平場	
28	IF69-1157	宿戸館	しゅくのへだて	種市第7地割	中世	城館跡	単郭、堀跡、平場	昭和59年度調査
29	IF69-2013	西の館跡	にしのだてあと	種市第7地割	中世	城館跡	土塁、堀跡、平場	昭和59年度調査
30	IF69-2020	西館の田	にしだてのた	種市第7地割	縄文	散布地	縄文土器(晩期)、石器、土偶	
31	IF69-2041	上岡谷	かみおかや	種市第7地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)	
32	IF69-2380	大平	おおひら	種市第3地割	縄文、弥生	集落跡	縄文土器(早・晩期)、弥生土器	
33	IF69-2393	ホクリ貝塚	ほくりかいづか	種市第2地割	縄文、古代	貝塚	縄文土器、製塩土器、カキ、ミルクイ、土師器	
34	IF77-0201	細沢鉄山	ほそざわてつざん	種市第74地割	近世	製鉄関連	鉄滓	
35	IF77-1027	濁川鉄山	にごりがわてつざん	種市第73地割	近世	製鉄関連	鉄滓	
36	IF79-0123	小田の沢鉄山	おだのさわてつざん	種市第3地割	近世	製鉄関連	鉄滓	
37	IF79-0351	八木貝塚	やぎかいづか	種市第1地割	縄文	貝塚	縄文土器(晩期)、鹿角	
38	IF79-0373	袖山	そでやま	種市第1地割	縄文、古墳	集落跡	縄文土器(中・後期)、石製模造品(古墳時代)	
39	IF79-1245	長坂	ながさか	小子内第1地割	縄文	散布地	縄文土器(後・晩期)	
40	IF79-1358	小子内貝塚	おこないかいづか	小子内第5地割	縄文	貝塚	染付磁器、鉄片、ミルクイ、インダタミ	
41	IF79-2344	黒マッカ貝塚	くろまっかかいづか	有家第2地割	縄文、古代	貝塚	縄文土器(後期)、石器、土師器	
42	IF89-0339	向折戸	むかいおりど	有家第3地割	縄文	集落跡	縄文土器(晩期)、石斧	
43	IF89-0340	上のマッカ	うえのまっか	有家第5地割	縄文	集落跡	縄文土器(前～後期)、石斧、剥片	範囲変更(平成23年度)
44	IF89-0353	有家館	うげだて	有家第5地割	中世	城館跡	単郭、堀跡(破壊)	昭和59年度調査、範囲変更(平成23年度)
45	IF99-1153	芦毛渡鉄山	あしげわたつざん	中野第7地割	近世	製鉄関連	鉄滓	
46	IG80-0056	有家台場	うげだいば	中野第8地割	近世	砲台場跡	土塁	昭和59年度調査
47	IG80-1006	大宮II	おおみやに	中野第2地割	縄文、弥生	散布地	縄文土器(早期)、弥生土器	
48	IG80-1008	大宮I	おおみやいち	中野第2地割	縄文、弥生	集落跡	縄文(早・前・晩期)、石錘、弥生土器	
49	IG80-1063	長根塚	ながねづか	中野第2地割	縄文	散布地	縄文土器	
50	IG80-2004	中野館(館桜・蝦夷館)	なかのだて	中野第4地割	中世	城館跡	単郭、堀跡(破壊)	昭和59年度調査
51	IG90-0005	蝦夷塚	えぞづか	中野第11地割	縄文	集落跡	縄文土器	範囲変更(平成23年度)
52	IG90-0085	藤好沢	ふじよしざわ	中野第7地割	縄文	集落跡	縄文土器(前・晩期)、石刀	

第1表 町内の遺跡一覧(1)

53	IF38-1072	アイヌ森	あいぬもり	種市第39地割	縄文、弥生、 古代	散布地	縄文土器（前～晩期）、縄文晩期後葉～ 弥生前期の土器、石器、土師器	別記※2、浜通遺跡から名称・範囲 変更（平成23年度）
54	欠番	-	-	-	-	-	-	北/沢遺跡登録抹消（範囲名称変更のため）
55	IF48-0194	平内Ⅲ	ひらないさん	種市第34地割	縄文	散布地	縄文土器（中期）、磨石	別記※2、範囲変更（平成23年度）
56	IF48-1025	石倉	いしくら	種市第37地割	縄文、古代	散布地	縄文土器（後期）、敲石、礫器、土師器	別記※2、範囲変更（平成23年度）
57	IF48-2023	榎割	ひつわり	種市第30地割	縄文	散布地	石棒	
58	IF56-1358	ニサグドウ	にさくどう	種市第63地割	縄文、古代	散布地	縄文土器（晩期）、土師器、支脚	
59	IF57-2323	高取I	たかとりいち	種市第21地割	縄文	散布地	縄文土器	
60	IF57-2279	高取II	たかとりに	種市第21地割	縄文	集落跡	縄文土器（中・晩期）	
61	IF69-0042	戸類家	へるけ	種市第11地割	縄文	散布地	縄文土器（晩期）、土偶	
62	IF69-2113	向山	むかいやま	種市第6地割	縄文	散布地	縄文土器	
63	IF68-2337	田ノ沢	たのさわ	種市第7地割	縄文	散布地	縄文土器（晩期）	
64	IF89-0378	向長根	むかいながね	有家第8地割	縄文	散布地	縄文土器	
65	IF48-0017	平内II	ひらないに	種市第43地割	縄文、弥生、 近世	散布地、狩 猟場跡	堅穴住居跡、屋外炉、土坑、溝状遺構、 集石、溝跡、焼土遺構、縄文土器（早 期中葉・中期末～後期前葉）、弥生土器 （前期後半）、土製品、石器、石製品、 鉄製品、煙管、銭貨	別記※1～※4、平成11～13年度・ 23～25年度本発掘調査、範囲変更 （平成23年度）
66	IF79-0119	大浜	おおはま	種市第3地割	縄文	集落跡	縄文土器、石器	
67	IF69-1109	館	たて	種市第7地割	縄文	集落跡	縄文土器（中期）	
68	IF56-2350	大沢	おおさわ	種市第66地割	縄文	散布地	縄文土器	平成13年度新規発見
69	IF38-0098	二十一平	にじゅういちたい	種市第41地割	古代	製塩遺跡	製塩土器、土製支脚、土師器	別記※2、平成15年度新規発見、 範囲変更（平成23年度）
70	IF59-2161	玉川I	たまがわいち	種市第13地割	縄文	散布地	縄文土器（早期）	
71	IF59-2038	玉川II	たまがわに	種市第14地割	縄文	散布地	縄文土器（前期）	
72	IF69-1126	馬場	ばば	種市第7地割	縄文	散布地	縄文土器	平成16年度新規発見、範囲変更（平 成23年度）
73	IF89-0314	八森	はちもり	有家第3地割	縄文、奈良	集落跡	堅穴住居跡、縄文土器、石器、土師器	別記※11、平成16年度新規発見、 範囲変更（平成23年度）、平成28 年度本発掘調査
74	IF86-0118	向田II	むかいがに	大野第20地割	縄文	散布地	縄文土器	
75	IF86-0137	向田	むかいが	大野第23地割	縄文	散布地	縄文土器（後期）、石器	
76	IF86-0144	向田I	むかいがいち	大野第20地割	縄文	散布地	縄文土器（後期）、石器	
77	IF87-1082	明戸館	あけとだて	大野第29地割	中世	城館跡	単郭、土塁、堀跡、平場	昭和59年度調査
78	IF87-2100	萩の渡	はぎのわた	大野第36地割	近世	製鉄関連	鉄滓	
79	IF87-2366	沢山館（蝦夷館）	さわやまだて	大野第49地割	中世	城館跡	堀跡、単郭	昭和59年度調査
80	IF88-2284	牛転ばし林館	うしころばしやしだて	大野第55地割	中世	城館跡	堀跡、平場	昭和59年度調査
81	IF96-0272	たてひら館	たてひらやかた	大野第13地割	中世	城館跡	郭跡、堀跡、平場	昭和59年度調査
82	IF96-0387	長根	ながね	大野第72地割	縄文	散布地	縄文土器（後・晩期）、石器	
83	IF96-1280	蝦夷森館	えぞもりだて	大野第10地割	中世	城館跡	郭跡、堀跡、平場	昭和59年度調査
84	IF96-2238	横岸沢II	よこぎざわに	大野第4地割	縄文	散布地	石器、壺	
85	IF96-2249	横岸沢I	よこぎざわいち	大野第5地割	縄文	散布地	壺、石器	
86	IF96-2316	大野館	おおのだて	大野第5地割	中世	城館跡	平場	昭和59年度調査
87	IF97-0012	ひとつこ館	ひとつこだて	大野第69地割	中世	城館跡	単郭、堀跡、平場、堅穴	昭和59年度調査
88	IF97-2055	金ヶ沢	かねがさわ	大野第59地割	縄文	散布地	縄文土器（前期）	
89	IF98-1299	阿子木館	あこぎだて	阿子木第4地割	中世	城館跡	単郭、堀跡、堅穴	昭和59年度調査
90	JF07-0168	高森II	たかもりに	大野第57地割	縄文	散布地	縄文土器	
91	JF07-2061	上水沢I	かみみずざわいち	水沢第5地割	縄文	散布地	縄文土器	
92	JF07-2188	上水沢II	かみみずざわに	水沢第7地割	縄文、弥生	集落跡	縄文土器（早～後期）、弥生土器、土製 品、石器、アスファルト塊、鉄製品、銭貨、 陶磁器（近・現代）	別記※7、平成12年度本発掘調査
93	JF07-2196	上水沢III	かみみずざわさん	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
94	JF07-2204	高森I	たかもりいち	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
95	JF07-2272	上水沢IV	かみみずざわよん	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
96	JF07-2275	上水沢V（蝦夷館）	かみみずざわご	水沢第7地割	中世	城館跡	単郭	昭和59年度調査
97	JF07-2288	下水沢I	しもみずざわいち	水沢第8地割	縄文	散布地	剥片	
98	JF07-2294	上水沢VI	かみみずざわろく	水沢第9地割	縄文	散布地	縄文土器	
99	JF08-0067	堤内	つつみない	大野第57地割	縄文	散布地	縄文土器	
100	JF08-0129	日当I	ひなたいち	大野第57地割	古代	散布地	土師器	
101	JF08-0186	下帯島I	しもたいしまいち	帯島第11地割	縄文	散布地	縄文土器	
102	JF08-0221	日当II	ひなたに	阿子木第9地割	縄文	散布地	縄文土器	
103	JF08-0225	阿子木	あこぎ	阿子木第12地割	縄文	散布地	縄文土器	

第1表 町内の遺跡一覧(2)

104	JF08-1108	下帯島II	しもたいしまに	帯島第 11 地割	縄文	散布地	縄文土器	
105	JF08-1156	蝦夷館I	えぞだていち	帯島第 5 地割	中世	城館跡	平場、堀跡	昭和 59 年度調査
106	JF08-1199	上帯島I	かみたいしまいち	帯島第 8 地割	縄文	散布地	縄文土器	
107	JF08-1225	二ツ屋	ふたつや	阿子木第 18 地割	縄文	散布地	縄文土器	
108	JF08-1254	下帯島III	しもたいしまさん	阿子木第 18 地割	古代	散布地	土師器	
109	JF08-1272	下帯島IV	しもたいしまよん	帯島第 9 地割	縄文	散布地	縄文土器	
110	JF08-1375	二ツ屋向	ふたつやむかい	阿子木第 12 地割	縄文	散布地	縄文土器	
111	JF08-1398	長塚森I	ちようづかもりいち	阿子木第 12 地割	縄文	散布地	縄文土器	
112	JF08-2059	高森III	たかもりさん	帯島第 4 地割	縄文	散布地	縄文土器	
113	JF08-2073	大渡IV	おおわたりよん	帯島第 1 地割	縄文	散布地	縄文土器	
114	JF08-2081	大渡V (蝦夷館)	おおわたりご	帯島第 1 地割	中世	城館跡か?	単郭、堀跡	昭和 59 年度調査
115	JF08-2111	蝦夷館	えぞだて	帯島第 4 地割	中世	城館跡	単郭、堀跡	昭和 59 年度調査
116	JF08-2117	関口I	せきぐちいち	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
117	JF08-2127	関口II	せきぐちに	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
118	JF08-2148	上帯島II	かみたいしまに	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
119	JF08-2194	上帯島III	かみたいしまさん	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
120	JF08-2211	上帯島IV	かみたいしまよん	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
121	JF08-2269	弥栄I	いやさかいち	弥栄	縄文	散布地	縄文土器	
122	JF08-2287	弥栄III	いやさかさん	弥栄	縄文	散布地	縄文土器	
123	JF08-2298	弥栄IV	いやさかよん	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
124	JF08-2301	弥栄V	いやさかご	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
125	JF08-2304	弥栄VI	いやさかろく	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
126	JF08-2318	長塚森II	ちようづかもりに	阿子木第 12 地割	縄文	散布地	縄文土器 (後期)、壺	
127	JF08-2322	弥栄VII	いやさかなな	弥栄	縄文	散布地	縄文土器	
128	JF08-2353	弥栄VIII	いやさかはち	弥栄	縄文	散布地	縄文土器	
129	JF08-2357	弥栄IX	いやさかきゆう	弥栄	縄文	散布地	縄文土器	
130	JF08-2371	弥栄X	いやさかじゆう	弥栄	縄文	散布地	縄文土器	
131	JF08-2373	弥栄XI	いやさかじゆういち	弥栄	縄文	散布地	縄文土器	
132	JF08-2380	弥栄XII	いやさかじゆうご	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
133	JF09-1022	長塚森III	ちようづかもりさん	阿子木第 12 地割	縄文	散布地	石鏃	
134	JF09-1051	長塚森IV	ちようづかもりよん	阿子木第 12 地割	縄文	散布地	縄文土器	
135	JF09-2071	弥栄II	いやさかに	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
136	JF17-0140	上水沢VII	かみみずさわなな	水沢第 3 地割	縄文	散布地	縄文土器 (後期)	
137	JF17-0218	下水沢II	しもみずさわに	水沢第 9 地割	縄文	散布地	縄文土器	
138	JF17-0296	金間部I	かなまふいち	水沢第 12 地割	近世	製鉄関連	籬の羽口、鉄滓	
139	JF17-0297	金間部II	かなまふご	水沢第 12 地割	縄文、 古代、 近世	散布地	縄文土器、土師器、寛永通宝	
140	JF17-0337	大渡I	おおわたりいち	水沢第 10 地割	縄文	散布地	縄文土器	
141	JF17-0339	大渡II	おおわたりご	水沢第 10 地割	縄文	散布地	縄文土器	
142	JF17-1022	生平I	おいたいらいち	水沢第 2 地割	縄文	散布地	縄文土器	
143	JF17-1024	生平II	おいたいらご	水沢第 2 地割	縄文	散布地	縄文土器	
144	JF17-2003	青菜畑II	あおなはたに	水沢第 14 地割	縄文	散布地	縄文土器 (後期)	
145	JF17-2027	青菜畑	あおなはた	水沢第 13 地割	縄文	散布地	縄文土器、石器	
146	JF18-0002	大渡III	おおわたりさん	帯島第 2 地割	縄文	散布地	縄文土器	
147	JF18-0103	帯島開拓地I	たいしまかいたくいち	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
148	JF18-0108	帯島開拓地II	たいしまかいたくご	弥栄	縄文	散布地	縄文土器	
149	JF18-0116	帯島開拓地III	たいしまかいたくさん	帯島第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器	
150	JF18-1052	太田	おおた	水沢第 11 地割	縄文	散布地	縄文土器	
151	IF37-1367	堆中山I	たいなかやまいち	種市第 41 地割	縄文	散布地	石斧	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
152	IF38-1042	堆中山II	たいなかやまご	種市第 41 地割	縄文	散布地	縄文土器、礫器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
153	IF38-2001	角川目II	かどかわめに	種市第 39 地割	縄文	散布地	縄文土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
154	IF37-2343	田ノ端I	たのはたいち	種市第 42 地割	縄文	散布地	縄文土器 (後期)	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
155	IF37-2356	笹花I	ささはないち	種市第 43 地割	縄文	散布地	縄文土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
156	IF38-2053	笹花II	ささはなに	種市第 43 地割	縄文	散布地	縄文土器 (後期)	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
157	IF37-2379	笹花III	ささはなさん	種市第 43 地割	縄文	散布地	縄文土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
158	IF37-2397	笹花IV	ささはなよん	種市第 43 地割	縄文	散布地	縄文土器、石斧、礫器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
159	IF37-2392	伝吉II	でんきちに	種市第 43 地割	縄文	散布地	縄文土器 (前期)、石鏃	別記※ 2、平成 23 年度新規発見

第 1 表 町内の遺跡一覧 (3)

160	IF47-0239	伝吉Ⅲ	でんきちさん	種市第 44 地割	縄文	散布地	縄文土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
161	IF47-0238	伝吉Ⅳ	でんきちよん	種市第 44 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
162	IF47-0216	伝吉Ⅴ	でんきちご	種市第 44 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
163	IF47-0345	北ノ沢Ⅰ	きたのさわいち	種市第 45 地割	縄文	散布地	縄文土器(中期)、石鏃、削搔器、石斧、 敲石、剥片	別記※ 2、平成 23 年度新規発見、 範囲変更(平成 25 年度)
164	IF47-0333	北ノ沢Ⅱ	きたのさわに	種市第 45 地割	縄文、古代	散布地	縄文土器、土師器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
165	IF47-0258	北ノ沢Ⅲ	きたのさわさん	種市第 45 地割	縄文	散布地	縄文土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
166	IF47-0390	北ノ沢Ⅳ	きたのさわよん	種市第 45 地割	縄文、古代	散布地	縄文土器(前期)、土師器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
167	IF47-0344	北ノ沢Ⅴ	きたのさわご	種市第 45 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
168	IF47-0341	北ノ沢Ⅵ	きたのさわろく	種市第 45 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
169	IF47-0257	北ノ沢Ⅶ	きたのさわなな	種市第 45 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
170	IF47-0299	北ノ沢Ⅷ	きたのさわはち	種市第 45 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
171	IF47-1250	北ノ沢Ⅸ	きたのさわきゅう	種市第 45 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
172	IF47-1138	北ノ沢Ⅹ	きたのさわじゅう	種市第 45 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
173	IF38-2192	北平内Ⅰ	きたひらないいち	種市第 38 地割	縄文	散布地	縄文土器、石斧、礫器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
174	IF48-0127	北平内Ⅱ	きたひらないに	種市第 38 地割	縄文、古代	散布地	縄文土器、土師器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
175	IF48-0123	北平内Ⅲ	きたひらないさん	種市第 38 地割	縄文	散布地	縄文土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
176	IF48-0121	北平内Ⅳ	きたひらないよん	種市第 38 地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)、剥片	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
177	IF48-0110	北平内Ⅴ	きたひらないご	種市第 38 地割	縄文、弥生	散布地	縄文土器(後・晩期)、縄文晩期後葉～ 弥生前期の土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
178	IF48-0143	北平内Ⅵ	きたひらないろく	種市第 38 地割	縄文	散布地	縄文土器、石斧、敲石	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
179	IF48-0158	浜平内	はまひらない	種市第 36 地割	縄文	散布地	縄文土器(早・晩期)、石斧、敲石	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
180	IF48-0174	平内Ⅳ	ひらないよん	種市第 35 地割	縄文、古代	散布地	縄文土器(前期)、石斧、敲石、土師器、 須恵器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
181	IF48-0197	平内Ⅴ	ひらないご	種市第 35 地割	縄文	散布地	縄文土器(前期)、石斧、礫器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
182	IF48-1200	南平内Ⅰ	みなみひらないいち	種市第 33 地割	縄文	散布地	縄文土器(晩期)、製塩土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
183	IF48-1119	南平内Ⅱ	みなみひらないに	種市第 32 地割	縄文	散布地	縄文土器、剥片石器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
184	IF48-1126	南平内Ⅲ	みなみひらないさん	種市第 32 地割	縄文	散布地	縄文土器、剥片	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
185	IF48-0041	西平内Ⅰ	にしひらないいち	種市第 37 地割	縄文、弥生	散布地	竪穴住居跡、竪穴状遺構、掘立柱建物 跡、陥し穴状遺構、土坑、焼土遺構、 炉跡、埋設土器、柱穴、配石遺構、整 地層、縄文土器(早・前・後期)、弥生 土器(後期)、石器、土製品、石製品	別記※ 2・※ 10、平成 23 年度新規 発見、平成 26 年度・27 年度本発 掘調査、平成 28 年度ハンドボーリ ング調査、範囲変更(平成 29 年度)
186	IF48-1040	西平内Ⅱ	にしひらないに	種市第 37 地割	縄文	散布地	縄文土器(前期)、石器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
187	IF48-1115	東平内Ⅰ	ひかりひらないいち	種市第 34 地割	縄文	散布地	縄文土器、石斧、敲石、礫器、剥片	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
188	IF48-1039	東平内Ⅱ	ひかりひらないに	種市第 34 地割	縄文	散布地	縄文土器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
189	IF48-1080	東平内Ⅲ	ひかりひらないさん	種市第 34 地割	不明	製鉄関連	羽口、鉄滓	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
190	IF47-1390	姥沢Ⅰ	うばざわいち	種市第 47 地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)、石鏃、石斧、剥片	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
191	IF47-1288	姥沢Ⅱ	うばざわに	種市第 47 地割	縄文、古代	散布地	縄文土器、石斧、土師器	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
192	IF47-1360	姥沢Ⅲ	うばざわさん	種市第 47 地割	縄文	散布地	縄文土器(前・後期)、削搔器、石斧、 剥片、古銭	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
193	IF47-1342	姥沢Ⅳ	うばざわよん	種市第 47 地割	縄文	散布地	縄文土器(中期)、削搔器、ピエスエスキ ュ、剥片	別記※ 2、平成 23 年度新規発見
194	IF48-1197	南川尻	みなみかわしり	種市第 28 地割	縄文	集落跡、狩 猟場跡	竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、焼土、 墓塚、縄文土器、石器	別記※ 8・※ 17、平成 25 年度新規 発見、平成 26 年度・平成 28 年度 本発掘調査
195	IF48-2128	サンニヤⅠ	さんにやいち	種市第 25 地割	縄文	集落跡、狩 猟場跡、布 地	竪穴住居跡、陥し穴状遺構、土坑、焼 土遺構、縄文土器、石器、鐔形土製品	別記※ 9・※ 13・※ 17、平成 25 年 度新規発見、平成 27 年度・28 年 度本発掘調査
196	IF58-0288	北鹿糠	きたかぬか	種市第 18 地割	縄文	集落跡、狩 猟場跡	竪穴住居跡、陥し穴状遺構、土坑、焼土、 縄文土器、石器	別記※ 12、平成 25 年度新規発見、 平成 27 年度・28 年度本発掘調査
197	IF58-1354	鹿糠浜Ⅱ	かぬかはまに	種市第 15 地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)、石器	平成 25 年度新規発見
198	IF58-1399	鹿糠浜Ⅰ	かぬかはまいち	種市第 15 地割	縄文	散布地	縄文土器、石器	平成 25 年度新規発見、範囲変更(平 成 29 年度)
199	IF69-1199	宿戸	しゅくのへ	種市第 5 地割	縄文	散布地	縄文土器、石器	平成 25 年度新規発見
200	IF69-2273	小田ノ沢	こだのさわ	種市第 3 地割	縄文	散布地	石器	平成 25 年度新規発見
201	IF79-1217	南八木	みなみやぎ	種市第 1 地割	平安	製鉄関連	羽口、鉄滓	平成 25 年度新規発見
202	IF89-1394	下向	しもむかい	中野第 1 地割	縄文、弥生	狩猟場跡	陥し穴状遺構、土坑、縄文土器、弥生 土器、石器	別記※ 8、平成 25 年度新規発見、 平成 26 年度本発掘調査
203	IF89-2323	中野城内	なかのじょうない	中野第 1 地割	縄文	狩猟場跡	陥し穴状遺構、土坑、土器、石器	別記※ 14、平成 25 年度新規発見、 平成 29 年度本発掘調査
204	IF89-1322	黒坂	くろさか	有家第 9 地割	縄文	集落跡	陥し穴状遺構	別記※ 15、平成 26 年度新規発見、 平成 26 年度本発掘調査
205	IF48-2231	サンニヤⅡ	さんにやに	種市第 25 地割	縄文、古代	集落跡	竪穴住居跡、土坑、陥し穴状遺構、土 師器、石器	別記※ 15・※ 16、平成 26 年度新 規発見、平成 26 年度・27 年度本 発掘調査
206	IF58-1333	南鹿糠Ⅰ	みなみかぬかいち	種市第 16・17 地割	縄文	集落跡	竪穴住居跡、溝跡、土坑、陥し穴状遺構、 縄文土器、石器	別記※ 15、平成 26 年度新規発見、 平成 26 年度本発掘調査

第 1 表 町内の遺跡一覧(4)

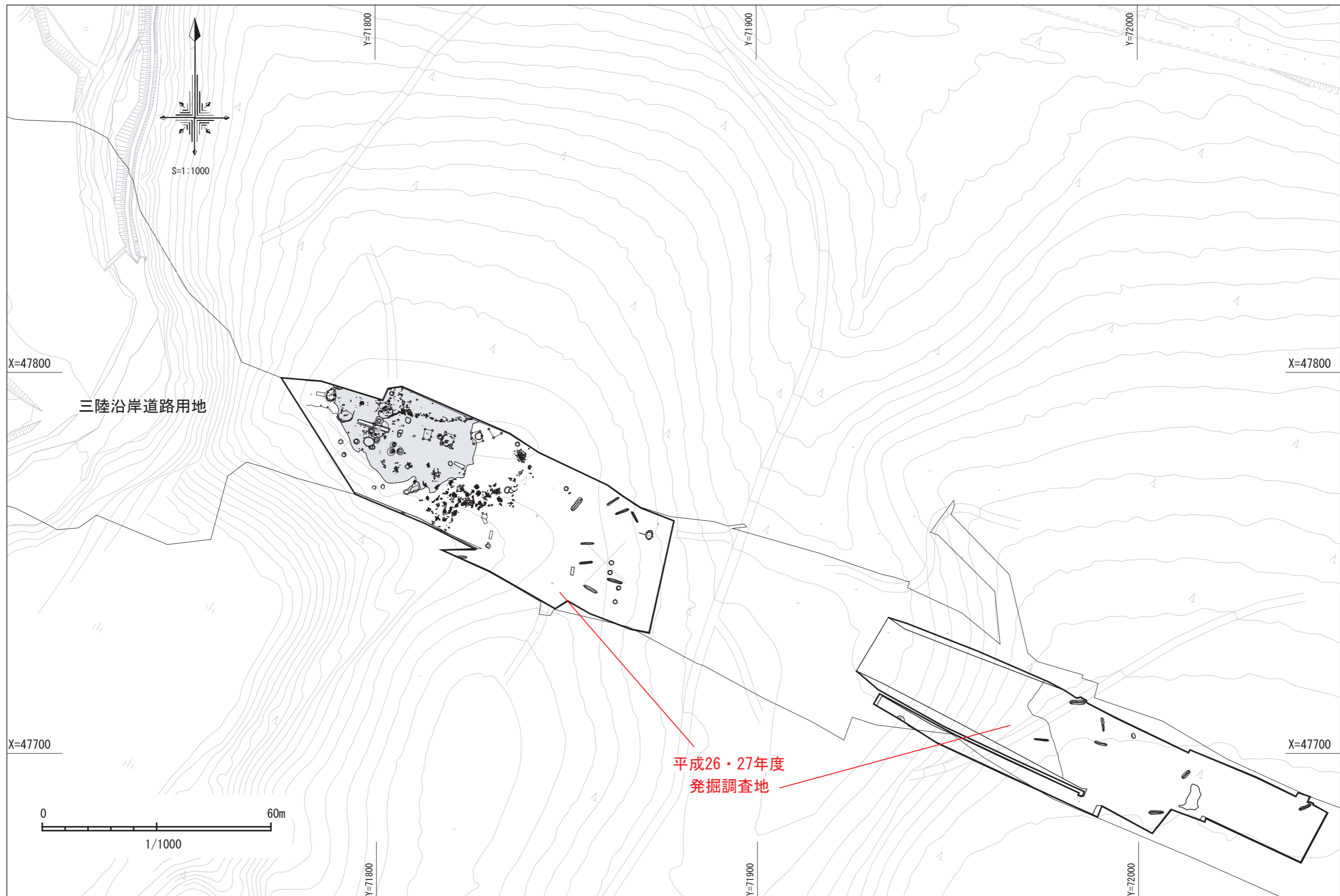


207	IF57-0174	館野	たての	種市第 53 地割	古代	散布地、製鉄関連	製塩土器（古代）、鉄滓	平成 27 年度新規発見、製鉄関連は時代不明
208	IF59-2021	北玉川	きたたまがわ	種市第 14 地割	縄文	散布地	縄文土器	平成 27 年度新規発見
209	IF37-2343	田ノ端II	たのはたに	種市第 44 地割	縄文	狩猟場跡、散布地	陥し穴状遺構、縄文土器、フレイク	平成 25 年度新規発見
210	IF58-0245	荒津内	あつない	種市第 20 地割	縄文	狩猟場跡、散布地	陥し穴状遺構、土坑、焼土、土師器片	平成 28 年度新規発見
211	IF67-2355	松ヶ沢I	まつがさわい	種市第 73 地割	縄文	散布地	土器、石器	平成 28 年度新規発見
212	IF58-2312	鹿糠浜III	かぬかはまさん	種市第 15 地割	縄文	散布地	陥し穴状遺構	平成 28 年度新規発見
213	IF79-0012	続石	つづいし	種市第 4 地割	縄文	散布地	縄文土器、石器	平成 29 年度新規発見
214	IF86-2265	新田	しんでん	大野第 14 地割	近世	製鉄関連	鉄滓	平成 29 年度新規発見
215	IF85-2335	一本松向I	いっぽんまつむかい	大野第 15 地割	縄文、古代、近世	散布地、製鉄関連	縄文土器、土師器、鉄滓	平成 29 年度新規発見、製鉄関連は時代不明
216	IF86-2053	一本松向II	いっぽんまつむかい	大野第 15 地割	縄文、近世	散布地、製鉄関連	縄文土器、鉄滓	平成 29 年度新規発見、製鉄関連は時代不明
217	IF58-1170	板橋	いたばし	種市第 21 地割	縄文	狩猟場跡	陥し穴状遺構	平成 29 年度新規発見
218	IF48-2250	サンニヤIII	さんにやさん	種市第 25 地割	縄文	狩猟場跡	陥し穴状遺構、縄文土器、石器	別記※ 17、平成 29 年度本発掘調査
219	IF67-2265	松ヶ沢II	まつがさわに	種市第 74 地割	不明	製鉄関連	鉄滓	平成 29 年度新規発見

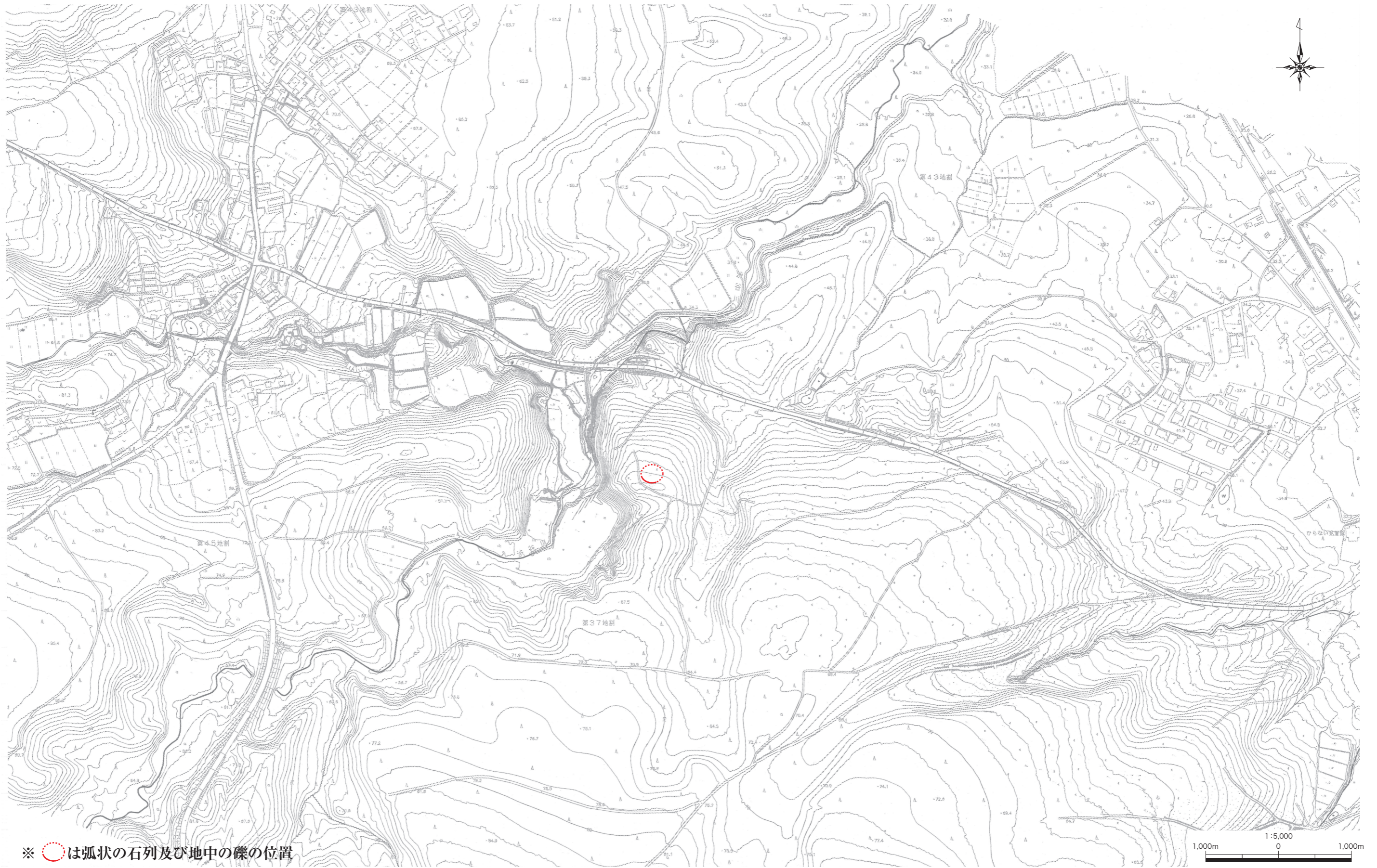
〈備考欄の文献について、それぞれ次のように略した〉

- 岩手県種市町教育委員会 2004 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 種市町埋蔵文化財調査報告書第 1 集は、「別記※ 1」
- 岩手県種市町教育委員会 2005 『種市町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ』 種市町埋蔵文化財調査報告書第 2 集は、「別記※ 2」
- 岩手県洋野町教育委員会 2013 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第 1 集は、「別記※ 3」
- 岩手県洋野町教育委員会 2015 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第 2 集は、「別記※ 4」
- 岩手県洋野町教育委員会 2017 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第 3 集は、「別記※ 5」
- (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996・2001  
『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 238 集・第 357 集は、「別記※ 6」
- 岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所 (財) 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター  
2002 『上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 391 集は、「別記※ 7」
- (公財) 岩手県文化振興事業団 2015 『平成 26 年度発掘調査報告書 南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋Ⅱ遺跡 沼袋Ⅲ遺跡  
八幡沖遺跡 ほか調査概報 (39 遺跡)』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 647 集は、「別記※ 8」
- (公財) 岩手県文化振興事業団 2016 『平成 27 年度発掘調査報告書 サンニヤ遺跡 房の沢Ⅳ遺跡 白石遺跡 ほか調査概報  
(33 遺跡)』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 661 集は、「別記※ 9」
- 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団  
2017 『西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 673 集は、「別記※ 10」
- (公財) 岩手県文化振興事業団 2017 『平成 28 年度発掘調査報告書 岩洞湖Ⅰ遺跡・柗洞Ⅳ遺跡・八森遺跡 ほか調査概報  
(28 遺跡)』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 676 集は、「別記※ 11」
- 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団  
2018 『北鹿糠遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 686 集は、「別記※ 12」
- 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団  
2018 『サンニヤⅠ遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 687 集は、「別記※ 13」
- (公財) 岩手県文化振興事業団 2018 『平成 29 年度発掘調査報告書 岩洞湖Ⅰ・Ⅱ遺跡 和野新墾神社遺跡 北野Ⅱ遺跡  
木戸場遺跡 中野城内遺跡 沼里遺跡 根平沢穴田Ⅳ遺跡 耳取Ⅰ遺跡 千厩城遺跡 ほか調査概報 (23 遺跡)』  
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 692 集は、「別記※ 14」
- 岩手県教育委員会 平成 28 年 3 月 『岩手県内遺跡発掘調査報告書 (平成 26 年度 復興関係)』  
岩手県文化財調査報告書第 146 集は、「別記※ 15」
- 岩手県教育委員会 平成 29 年 3 月 『岩手県内遺跡発掘調査報告書 (平成 27 年度 復興関係)』  
岩手県文化財調査報告書第 149 集は、「別記※ 16」
- 岩手県教育委員会 平成 30 年 3 月 『岩手県内遺跡発掘調査報告書 (平成 28 年度 復興関係)』  
岩手県文化財調査報告書第 152 集は、「別記※ 17」

## 第 1 表 町内の遺跡一覧(5)



第4図 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査遺構配置図



第5図 調査区周辺の地形図

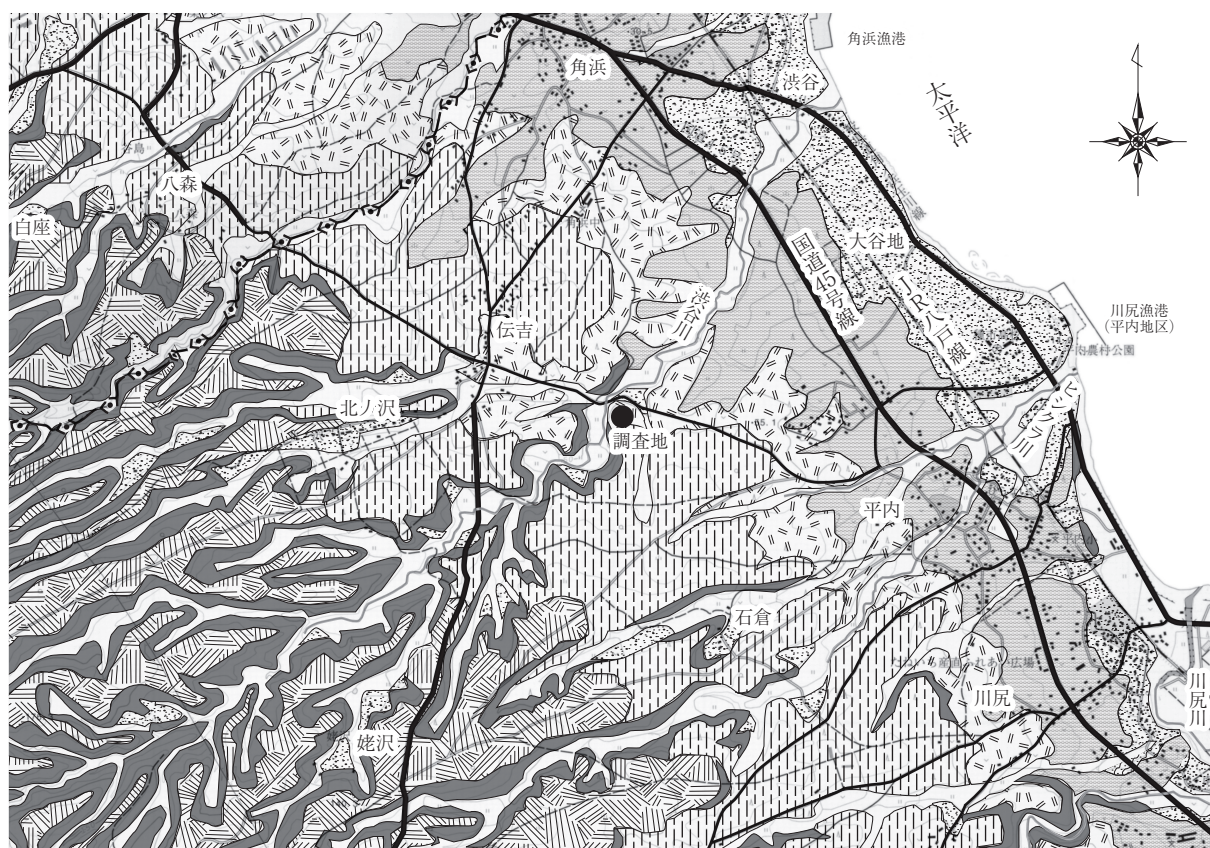
### Ⅲ. 遺跡の地形と地質

日本地質学会会員 松山 力

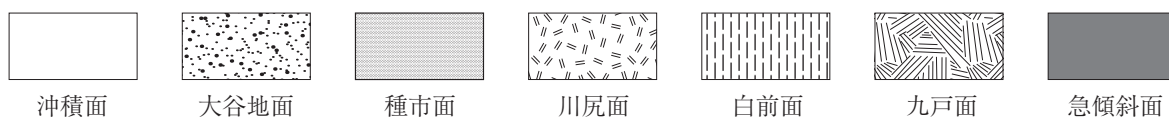
#### 1. 位置と周辺の地形

本遺跡は洋野町北東部、北東方の太平洋岸から約 1.5km 前後、北西方の青森県境からも約 1.5km の、北緯 39° 31′ 23″、東経 141° 55′ 44″ 地点の周囲、西側の渋谷川と、遺跡の北東方 300m で渋谷川に合する東側の小谷とに挟まれて、南から北に舌状に張り出す平頂丘陵地に立地している遺跡である。

渋谷川は、西方を南北に屈曲して伸びる九戸段丘（後述）の幅狭い平頂丘陵地から東北東方向に並行的に流れ下る幾つもの河川の一つで、西南西方 4km に主源流を発し、北東方 1.9km で太平洋へ注ぐ川である。



地形区分図凡例



第 6 図 遺跡周辺の地形区分図

遺跡南南西方の姥沢と麦沢との間を通り抜け、平内中心街に向かう川と、遺跡南方 4km 余に源を持って東北東へ向かい、遺跡南東の石倉の北側を通り、中心街に向かう谷がある。

また渋谷川北方の北ノ沢と伝吉の間を流れて渋谷川に合流する谷がある。その北には県境に沿って流れる谷がある。

これらの谷の間を隔てる丘陵は、いずれも西方を南北に延びる九戸段丘から東北東へ高度を低め、白前・川尻・種市・大谷地の各段丘（後述、第 2 表）へと続いている。

遺跡は、西側を北流する渋谷川との比高差が 20m ほどの白前段丘面から川尻段丘にかけての面上を占めている。

遺跡直近域を含む地域は、北上高地最北端の種市岳（標高 739.6m、青森県側では階上岳と呼ぶ）の北側から東側を取り巻いて、南方に続く丘陵地域にあり、丘陵地は幾段もの段丘群で構成されている。

段丘とは、平坦地や緩起伏地の上面（段丘面）とその周りの急斜面（段丘崖）で構成される階段状の地形のことである。段丘前面の高度は、海水面変動や台地の隆起・沈降などの変動が静穏な時期の海水面や河水面の高度を示す。短期間に海水面が低下するか、大地が隆起すれば、水面上に現れた部分が波浪や水流で浸食が進み、水際に崖ができてゆく。海岸の場合は、海底の陸化で海岸線が次第に沖方向に後退するにつれて浸食が進み、海岸に崖（海食崖）ができて段丘崖になり、海成段丘ができる。河岸の場合は、浸食は河口から始まって川床の段差で滝が生じ、滝の位置は次第に上流方に移動しながら下流方に平坦面が開けて、河成段丘が形成されてゆく。

丘陵とは、一般に高さ（海拔）が 200～600m 以下で、起伏が山地より小さくて平野よりも大きく、谷による開析（浸食）が進んで頂部が丸みを帯び、それと側面の急な斜面とが組み合わせられた集合地形のこと（平凡社・地学事典より）である。多くの丘陵の原地形が段丘であるため、頂部に平坦地や緩斜面が残されていれば、平頂丘陵と呼び、段丘として扱うことが多い。

段丘群は、青森県側では、馬淵川下流域、八戸湾に続く太平洋岸、階上岳北麓から東麓に囲まれた地域で、上位から下位に、蒼平段丘、白銀平段丘、高館段丘、湊段丘、根城段丘、田面木段丘（1966、1969、1983、2001）に区分されている。

また、岩手県側では、かつて、高位から、九戸段丘、白前段丘、種市段丘、玉川段丘などに分けられていたが、2000 年代に入り、筆者は種市段丘を川尻段丘と種市段丘に分け、洋野町の玉川段丘相当の段丘を大谷地段丘と呼んだ（2004）。さらに筆者は、段丘崖で隔てられた段丘面高度によって、高位の九戸段丘面を高取面、麦沢面、姥沢面の三面に分け、それに次ぐ高位の白前段丘面を伝吉面と雪畑面の二面に区分した（2005）。段丘面名に前面の段丘崖を加えて呼べば段丘名になる。第 2 表は、その対比表である。

段丘や丘陵の平坦地や緩傾斜地は通常、その上部に、土台の岩盤の風化物や陸上で形成されたロームや火山灰などの地層（風成層）を載せていることが多い。

九戸段丘は、九戸火山灰層を載せ、数十万年以上前に形成された面高度 90m 以上の段丘である。白前段丘は天狗岱火山灰層を載せる段丘で、数十万年前から約 13 万年前までに形成された面高度 50m 以上の段丘である。広義の種市段丘上部にあたる川尻段丘は高館火山灰を載せる段丘で、後期更新世（13 万年～1 万年前）前期始めに形成された面高度 30m 以上の段丘である。川尻段丘は、火山灰層の高館火山灰層の中部以上を載せる面高度 20m 以上の段丘、大谷地段丘は後期更新世末期近くに形成された段丘である。

岩手県北東部			青森県南東部		
本報告（数は面高度＝海拔：単位はm）			松山力（2003）	大池昭二ら（1970）	
海岸・谷底平野			沖積地	海岸・谷底平野	
沖積段丘	大谷地面	10～20	大谷地段丘		
種市段丘	平内面	20～40	種市段丘	根城段丘・湊段丘	
	横手面	30～60	川尻段丘	高館段丘	
白前段丘	雪畑面	50～80	白前段丘	天狗岱段丘	野場段丘
	伝吉面	70～100			白銀平段丘
九戸段丘	姥沢面	90～145	九戸段丘	蒼前平低位段丘	
	麦沢面	130～190		蒼前平高位段丘	
	高取面	170～220			

第2表 岩手県北東部地域の段丘（面）と対比

## 2. 周辺地域の地質

洋野町域の基盤地質は、東側のJR八戸線と海岸線の間を除き、おおむね花崗閃緑岩で占められ、JR八戸線と海岸線の間は、角浜から渋谷川河口付近までが白亜紀（1.45億年～0.66億年前）初期に形成されたとされるデイサイト～流紋岩質熔岩や火山碎屑岩、そこから有家川河口付近までは白亜紀末期の海成層とされる礫岩や凝灰岩を伴う砂岩層で、種市層と呼ばれている。

以上の基盤岩の上には、砂礫層、砂層、泥層などの段丘堆積物が載り、火山碎屑物を挟在する褐色系色調の粘土質風化火山灰（いわゆるローム）層、黒色土（クロボク）層などに覆われている。

ロームは砂・泥（シルト・粘土）の混じり合った粘土質土壌のことである。地表上に露出した岩石や火山碎屑物などの風化物、風で運ばれ堆積した風化物、塵埃、黄土（レス）などの混合物で、褐色系色調を呈し、その層中に軽石や火山灰・スコリアなどの火山碎屑物を幾枚も挟んでいることが多い。岩手県北から青森県南東部にかけての地域のローム層は、更新世火山碎屑物起源の風化物の混合割合が高いので、筆者を含む研究グループでは、挟在する火山碎屑物層を一括して火山灰層という名で、古い方から、九戸火山灰層、天狗岱火山灰層、種市火山灰層、八戸火山灰層に区分してきた。

九戸火山灰層は、縦方向の割れ目が目立つしまった濃暗褐色系色調のローム層で、洋野町域での厚さが2～3m、南方と西方に厚くなり挟在する粘土化した碎屑物の枚数も増加する。碎屑物の時期は、更新世前期以降～中期中程（数十万年前）までと思われる。

天狗岱火山灰層は、数十万年前から約13万年前頃までの、それぞれに特徴ある粘土化した軽石や火山灰などの粘土化した火山碎屑物を挟む暗褐色系色調のよくしまったローム層で、南方に火山碎屑物層の枚数と厚さが尖減する。

高館火山灰層（岩手県教委、2004の種市火山灰層）は、幾枚ものそれぞれに特徴ある粘土化した火山碎屑物を挟む、明褐色系色調を主とするローム層で、南方に火山碎屑物層の枚数と厚さが漸減する。青森県内南縁までは

下部に洞爺火山灰層（13～12万年前）が挟在するが、洋野町域では下部の露頭に遭遇していないので、確認していない。

八戸火山灰層は、約1.5万年前、十和田火山の巨大噴火によって噴出した火山砕屑物で、青森県東部の上北地方南部から岩手県北の二戸・九戸地方の、谷底平野・海岸平野の沖積地を除く、ほぼすべての地形面を覆う火山砕屑物相で、下部が降下相の火山砕屑物、上部が火砕流堆積物と二分される。

降下相の火山砕屑物は、色調がおおまかには灰白色～明黄褐色あるいは明黄橙色の軽石層と火山灰層の互層で、厚さは、全体としては十和田湖と八戸を結ぶ線上で大きく、東方へ漸次厚さを減じながら、北と南へ薄くなる。青森県の奥入瀬川南側の後藤川上流付近で5m、五戸町で2～4m、八戸周辺で1.5～2m、本遺跡に隣接する平内Ⅱ遺跡で60cm～1mである。大池ら（1970）や中川（1972）は本層を下位から上位に、Ⅰ～Ⅵ層の6層に区分している。本遺跡では、八戸火山灰層の精査をしていないので、隣接の平内Ⅱ遺跡の所見をもとに、各層の概要を述べる。

Ⅰ層は厚さが3～24cmの粘土～シルト状、あるいは上部が粘土～シルト状、下部が砂状のおもに明黄褐色～にぶい黄橙色の火山灰層である。Ⅱ層は厚さが2～10cm、粒度が2～22mmで灰白色、浅黄橙色、黄橙色、明黄褐色と多様な色調の軽石粒が集まる、にぶい黄褐色～明黄褐色軽石密集層で、軽石粒の間隙を砂質火山灰が充填している。Ⅲ層は厚さが5～30cm、しまつて硬い砂質火山灰層である。Ⅳ層は厚さが1～11cm、Ⅱ層と同様の色調で粒径2～30mmの軽石粒が集まる、黄褐色～にぶい黄褐色～明黄褐色軽石密集層で、間隙を砂質火山灰が充填している。Ⅴ層は厚さが1～18cmの黄褐色～明黄褐色のしまつた砂質火山灰層である。Ⅵ層は厚さが2～16cmで、粒径2～15mmの灰白色～浅黄褐色～黄褐色～橙色軽石粒と砂状火山灰との、にぶい黄褐色～黄褐色～明黄褐色の混合層で、一般的には下部ほど軽石粒が密集し、上部は軽石粒混じりの砂質火山灰層へ遷移している。

火砕流堆積物を欠く地域では、その上部は、厚さ4～28cmのにぶい黄褐色、黄褐色、明黄褐色等のローム状風化火山灰層とその腐植土層への遷移層で、その上に、腐植土層が載っている。腐植土層には、完新世火山砕屑物層が挟まれるか、砕屑物粒子が混合している場合が多い。

八戸火砕流堆積物は、分布域の降下相部に直接重なり、ほぼ連続して堆積したようである。当初、八戸浮石流凝灰岩（大池・中川、1979）、あるいは火山灰流凝灰岩と呼ばれた地層で、現在は十和田八戸火砕流堆積物あるいは略して、降下層ともどもあるいは単独に八戸テフラと呼ぶ研究者が多い。軽石・火山岩片・火山灰などの火山砕屑物で構成され、それぞれの混合割合は多様ながら、渾然一体となった岩相をもつ堆積物で、随所に天然木炭が含まれている。その分布は、西は大鰐・弘前市街地周辺から北は青森市域、東は青い森鉄道沿線から軽米町、二戸市～一戸町域にまで広がっているが、折爪岳東方では確認されていない。その上部は降下相の上部同様の層相で、腐植土層へ遷移している。

十和田湖周辺域では、八戸火砕流堆積物の上に、新期火山（大池ら・中川、工藤・佐々木2007の後カルデラ期火山）から放出された火山砕屑物が重なり、二ノ倉火山灰層と呼ばれていて、八戸市周辺の遺跡の黒色土層にも、混合した腐植土層が見られるが、洋野町域までは、及んでいないと思われる。

岩手県北から青森県南東部の丘陵・段丘群の面下には、暗褐色～黒褐色～黒色など黒色系色調のクロボクと呼ばれる腐植土（以下、黒色土類と言う）が発達している。その土層中には、下位から上位にかけて、南部軽石層、中振（チュウゼリ）軽石層、十和田b降下火山灰層、十和田a降下火山灰層と、朝鮮半島基部の白頭山由来の苦米地火山灰層を挟在し、またこれらを起源とする軽石粒火山灰粒などが混入している。

南部軽石（大池ら・中川らの南部浮石）は、十和田湖南部で1.5万年前頃から9,200年前頃まで活動を続けた十和田新期火山が破壊的爆発を引き起こし、放出された大量の軽石が降下堆積したもので、十和田湖の中湖から東方の久慈市付近まで、長楕円状の地域に分布している。十和田湖直近地域では軽石の粒度は10～20cm（最大

30cm あまり) と粗く、層の厚さも 10m (最大 30m) 前後であるが、東方に粒度と厚さを減じ、分布の長軸上にある青森県名久井岳付近では、数 (最大 10) cm の粒度の軽石が密集した、厚さ 1m 前後の、崩れやすい軽石層となっている。旧種市町域では、成層部で、間隙を砂粒大の火山灰で充填された、粒度数～10mm 程度の軽石粒が集まる、厚さ 10cm の軽石層となって挟まれている。隣接の平内Ⅱ遺跡では、粒径 2～10mm の浅黄橙色～ぶい黄褐色～黄橙色～明黄褐色～黄色軽石粒の密集層・密集塊として断続し、その上下や密集層・密集塊を欠くところでも側方で黒色土との混合層となっている。

中振軽石 (大池ら・中川の中振浮石) は、6100 年前に十和田湖中湖付近で起こった再度の大爆発で放出された大量の軽石が降下堆積したもので、十和田湖を起点に東方地域に広く分布するが、南部軽石と違って、南北方向への拡がり大きい。十和田湖東南方直近域で軽石の粒度は数～20cm で層の厚さは 5～10m と大きい。周辺から遠ざかるにつれて粒度と厚さを減じ、青森県十和田市街地周辺～五戸町域では厚さ 20～50cm、粒度は砂粒大～数 mm となり、八戸市域～二戸市域では砂粒大 (火山灰) となる。十和田市街地周辺や五戸町域でアワスナと呼ばれる由縁である。分布域の外側では、黒色土層中に砂粒大の火山砂塊として断続ないし点在するようになり、さらにその外側では黒色土との混合層として黒色土の色調を暗褐色～暗黄褐色に変えている。土器形式との関連では、十和田市明戸遺跡では直上に円筒下層 D 式土器が載り、同市中里遺跡では直下に円筒下層式土器出現の直前頃の土器群が出土している。隣接の平内Ⅱ遺跡では、砂粒大の密集火山灰塊や、黒色土の色調を褐色化するほど多量に混合する部位が認められている。

十和田 b 降下火山灰層は 2,700 年前の噴火によるもので、軽石層と火山灰層で構成されるが、青い森鉄道以東には、成層した地層としては、ほとんど分布しない。軽石部起源の数 mm 以下の堅い灰白色軽石粒は、洋野町域の黒色土中にも散在が認められる。

十和田 a 降下火山灰層は西暦 915 年の噴火によるものとされ、火砕流堆積物と降下した軽石層・火山灰層で構成されるが、国道 4 号線以東には、成層した地層としては分布しない。なお、青森県内や岩手県北では、遺構やその他の小さい窪地の埋積土中には、凸レンズ状に下方に緩やかに垂れ下がる厚さ数 cm 前後 (最大では 20～30cm) の火山灰層として、しばしば確認されている。

苦小牧火山灰は、十和田 a 降下火山灰の約 30 年後の 946 年前後に、朝鮮半島基部の白頭山から放出された火山灰とされている。火山灰層の産状は十和田 a 降下火山灰層とほぼ同様である。洋野町では確認されていないが、局部的に分布している可能性はある。



年前	15,000	14,000	13,000	12,000	11,000	10,000	9,000	8,000	7,000	6,000	5,000	4,000	3,000	2,000	1,000	
活動	主カルデラ	新期火山の誕生と活動					内側カルデラ誕生→現十和田湖へ									
区分	新 期 火 山 活 動															
火山噴出物	↓ 八戸降下火山灰 ↓ 八戸軽石流堆積物	←----- 中山崎溶岩流 -----→ 二の倉火山砕屑物 新郷軽石					↓ 南部軽石	↓ 小国軽石	↓ 御倉山溶岩	↓ 中掬軽石	↓ 十和田b火山灰	↓ 十和田a火山灰	↓ 毛馬内軽石流堆積物			
地形の変動	主カルデラ完成	南 半 部 中央火口丘誕生と成長					中湖カルデラ出現	湖底に浸食谷形成？	宇樽部段丘形成？	御倉山ドーム誕生	→現地形ほぼ完成 中山半島・御倉半島（基部）は新期火山体残存部 湖南部＝西湖・中湖・東湖 湖北部＝外湖…湖底平原					

※およその暦年代を、下記の工藤（2008）、工藤・佐々木（2007）など、工藤氏の関わる諸報告に合わせて作成

第3表 十和田火山の新期活動と十和田湖の変遷

十和田火山噴火エピソードの暦年代

カルデラ期

- ・十和田レッド軽石層：70,000～55,000年前の間
- ・十和田奥瀬火砕流堆積物：70,000～55,000年前の間
- ・十和田切田火山灰：29,600～29,000年前 ビスケット1
- ・十和田大不動火砕流堆積物：29,600～29,000年前
- ・十和田八戸火山灰層：15,300～14,900年前
- ・十和田八戸火砕流堆積物：15,300～14,900年前

- レッド浮石（軽石）層
- 奥瀬浮石（軽石）流凝灰岩
- ビスケット1
- 大不動浮石流（軽石）流凝灰岩
- 八戸浮石流（軽石）流凝灰岩

十和田後カルデラ期テフラ群

- ・二の倉テフラ群：15,000～9,200年前
- ・新郷軽石：11,000±年前
- ・椈山火山灰（早川）：10,400～10,100年前
- ・南部軽石層＝瞰湖台軽石層：9,200年前
- ・小国軽石層と中ノ沢火山灰層：8,200年前
- ・御倉山溶岩：7,500年前
- ・中掬軽石：6,100年前
- ・十和田bテフラ層：2,700年前
- ・十和田aテフラ層：西暦915年

- 二の倉火山灰層
- 南部浮石層＝瞰湖台浮石層
- 中掬浮石層
- 十和田b降下火山灰層
- 十和田a降下火山灰層

※右側は大池・中川・松山らの用いた該当層名

#### 主な引用・参考文献と付言

- 大池昭二・七崎 修・松山 力、1970、八戸平原地区地質調査報告書、東北農政局
- 小貫義男、1969、北上山地地質誌 168～169
- 鎌田耕太郎・秦 光男・久保和也・坂本 亨、1991、北部北上山地の地質Ⅰ、20万分の1地質図幅「八戸」、地質調査所
- 工藤 崇・佐々木 寿、2007、十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年、地学雑誌、116
- 工藤 崇、2008、十和田火山噴火エピソードE及びG噴火物の放射性炭素年代、火山、53
- 杉山了三、1983、ふるさと読本（地質編）、種市町教育委員会
- 東北地方第四紀研究グループ、1969、東北地方における第四紀研究海水準変化、日本の第四系、地団研専報15、地学団体研究会
- 中川久夫、1972、八戸平原地質調査報告書、東北農政局
- 中川久夫、1961、本邦太平洋沿岸地方における海水準静的変化と第四紀編年、東北大学地質古生物学教室邦文報告54
- 七崎 修、1999、櫛引遺跡、青森県埋蔵文化財調査報告書、第263集、p 8～9・11
- 濱田宏・宮内勝巳・藤田崇志・川村均、2017、西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書、岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書、第673集、p 2～4
- 松山 力・大池昭二、1986、十和田火山噴出物と火山活動、十和田科学博物館、4号
- 松山 力、2004、平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書、種市町埋蔵文化財報告書、第1集、4～15
- 松山 力、2005、種市町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ、種市町埋蔵文化財調査報告書・第2集、p 7～11
- 松山 力、2013、平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書、洋野町埋蔵文化財調査報告書、第1集、p 14～20
- 松山 力、2015、平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書、洋野町埋蔵文化財調査報告書、第2集、p 15～20
- 丸山浩治、2001、ゴッソー遺跡発掘調査報告書、岩手県文化財振興事業団埋蔵文化財調査報告書、第357集、p 5～13

## Ⅳ. ハンドボーリング調査の概要と成果

### 1. 調査に至る経過

第Ⅰ章で既述のとおり、西平内Ⅰ遺跡は平成26年度及び平成27年度に公益財団法人岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター（以下岩手県埋蔵文化財センターに略称する）により発掘調査が実施された遺跡で、検出された弧状の石列は調査区外の民有地に続き、それは環状を成すことが予想された。また、弧状の石列の外側に集石遺構が62基検出されており、集石遺構群も弧状を成して、外帯として環状に集石遺構群が存在することが想定された。洋野町教育委員会では、地中の礫の所在を確認し、配石遺構（弧状の石列）の形状と規模の確認、集石遺構の位置と範囲を把握するため、国庫補助金を導入して、ハンドボーリング調査を実施することとなった。当初の調査予定では、三陸沿岸道路の北側のみの予定であったが、三陸沿岸道路の南側の一部で林道用の刈り払いが行われており、ハンドボーリング調査作業が可能な部分があったので、土地所有者のご好意により、了承を得て調査を行った。

### 2. 調査の概要

調査は平成28年8月29日～平成28年9月23日の日程で行った。ハンドボーリング調査の作業は、洋野町シルバー人材センターへ業務委託として行った。

調査対象面積を約20,000㎡としていたが、礫の分布状況と調査期間の制約から、弧状の石列の続きの部分を中心に計11,471㎡の調査を行った。また、三陸沿岸道路の南側の調査面積は483㎡である。

調査経過は、次のとおりである。

8月22日～8月27日 下刈り作業

8月29日～9月7日 ハンドボーリング調査作業

9月8日～9月23日 礫の位置の測量及び図面作成

ハンドボーリング調査に使用したのは、長さ1m、厚さ9mmの鉄鋼棒の上部に、長さ24cm、厚さ1.3cmの同じく鉄鋼棒を溶接したT字形のボーリング棒である。

作業員10名で6日間、延べ人数54名で地中への刺突作業を行った。刺突の回数は数取器による計数値で延べ11万9,169回であった。礫の所在が確認された場所へ目印用の長さ90cm前後の木製の杭を立て、その地点を電子平板を用いて座標点測量を行った。グリットは岩手県埋蔵文化財センターによる発掘調査において設定された成果値を用いた。

第7図はハンドボーリング調査作業で礫が所在した場所をドットで示したものである。礫は地表面から浅い所で20cm、深い所でも40cm、平均すると30cm～40cmに所在している。刺突して礫の反応があった場合、刺突を3回以上繰り返して確認を行うよう努めた。調査区の現況は山林で、樹齢が50年を超えるものが多く、地中には木の根が多いものの、木根と礫とではボーリング棒が当たった時の音と感触が異なるので、誤認率はかなり低いものと思われる。また、小礫の場合はボーリング棒の突端が地中で滑り、ずれることが多く、刺突を繰り返すとボーリング棒に当たらなくなる。よって、拳大以上の礫を多く確認していると思われる。

なお、ドット図は地中で確認した全ての礫を表しているもので、配石、集石遺構の他に炉跡の礫の可能性のあるものや、単体の自然礫、石器類も混在し、また、大型礫の場合は、1個の礫に複数の点が計測されているものもあることが前提である。

### 3. 調査の成果

ハンドボーリング調査の成果は、次のとおりである。

- ・弧状の石列の配石遺構は環状となり、いわゆる環状列石と想定される。
- ・列石の形状は、やや楕円の円形で、規模は、長軸が最大で 30m、短軸は最大で 26m と想定される。
- ・列石に付属するトゲ状の石列と想定される箇所が複数確認された。
- ・58 号集石の北東 3m の所で集石遺構とみられる石の集合体が 1 カ所確認された。
- ・三陸沿岸道路の南側段丘平坦部で、集石遺構とみられる石の集合体が 1 カ所確認された。

### 4. まとめ

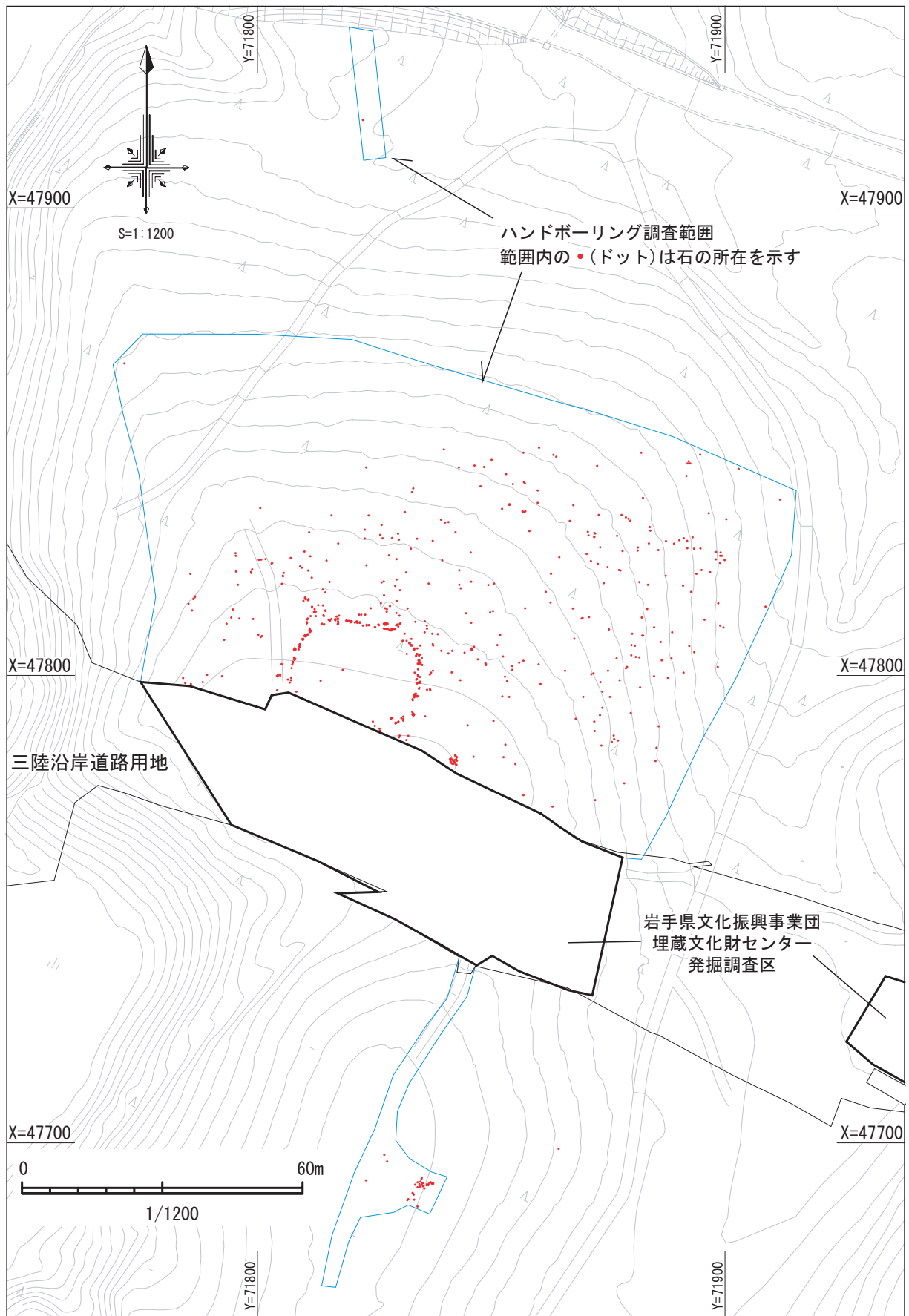
弧状の石列は、環状列石と想定されることが明らかとなった。勿論発掘による精査での裏付けが必要であるが、大型の環状列石となると三陸沿岸では初めての確認である。

集石遺構については、地中への刺突の確認では石の集合体の反応がほとんどなく、1 カ所のみであることから、発掘調査により検出された部分が中心で、外帯として環状に巡る可能性は低いとみられる。

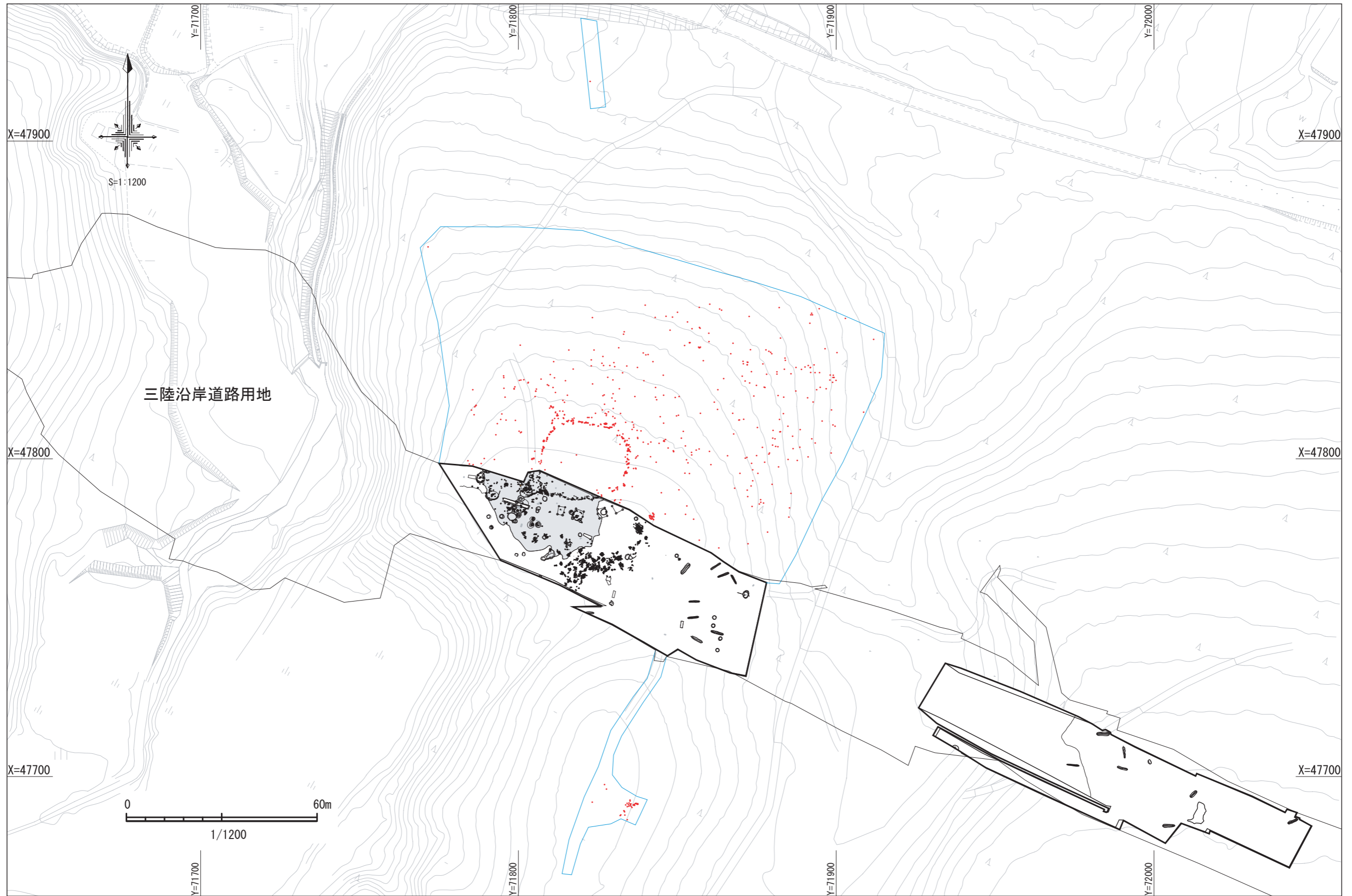
その一方で、三陸沿岸道路の南側では、極僅かな範囲での調査であったが、集石遺構と想定される石の集合体を確認された。また、その北側の農道として削平されたところから、集石の一部と考えられる礫が露出しているのが目視で確認された。この三陸沿岸道路南側では他にも集石遺構があることが考えられる。この段丘の平坦面は南側に広がっており、集石遺構以外の遺構の所在も予想される。

なお、時代は不明であるが、列石の北側 120m の所に、渋谷川へ続く道路状遺構とみられる長さ 40m 程の溝が地表面で確認された。

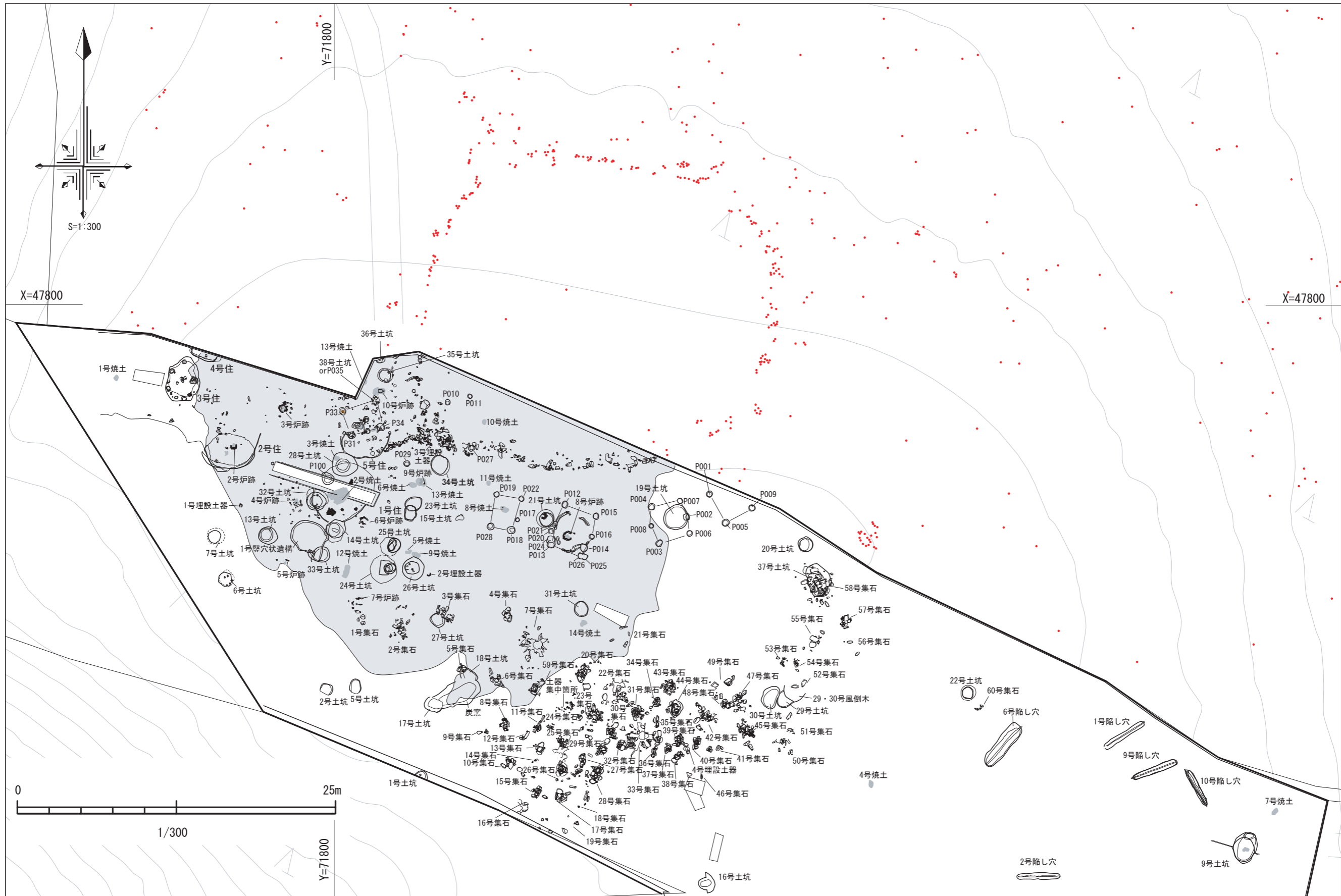
当然のことであるが、今回の調査で確認できるのは地中に所在する礫のみである。環状列石と想定できたことは成果であるが、その他にも岩手県埋蔵文化財センターによる調査の結果を受けて、発掘調査により明らかにしなければならない課題がある。33 頁の図で表したが、2 枚の整地層が検出されている。自然科学分析によると、環状列石と想定される中央付近の 1 地点のボーリングコアには褐色と暗褐色の土層がみられ、2 枚の整地層の可能性があるとのことである。列石全体を覆っているか否か、その範囲及び整地が行われた年代を把握しなければならない。また、弧状の石列の外側に掘立柱建物跡が 5 棟検出されたが、調査の範囲際で検出された柱穴もあり、列石の外側を掘立柱建物跡が巡ることも予想される。そして、トゲ状の石列の先端付近で列石より古い後期初頭の竪穴住居跡が検出されており、それと同時期の竪穴住居跡が他にも所在しているか、列石構築前の集落の様相と列石との時間差についての確認が必要である。さらには、焼土遺構、炉跡、埋設土器がどの程度所在するのか、それらの年代を把握し、青森県、秋田県、北海道で検出されている大型の環状列石と比較しての共通点や類似点、本遺跡だけの特徴等、発掘調査により内容を精査して、遺跡の性格を明らかにすることが必要である。



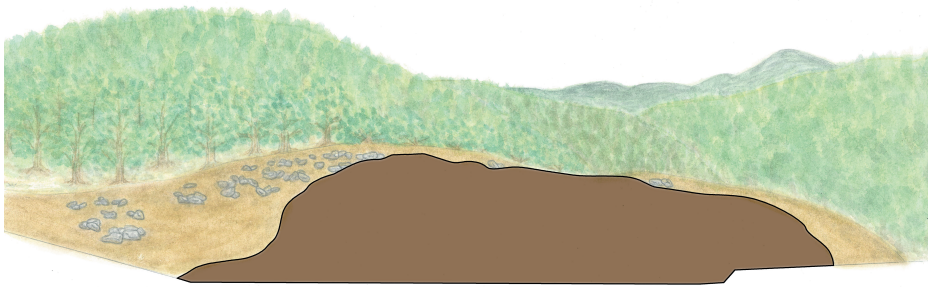
第7図 ハンドボーリング調査成果図



第8図 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター発掘調査遺構配置図とハンドボーリング調査成果図の合成



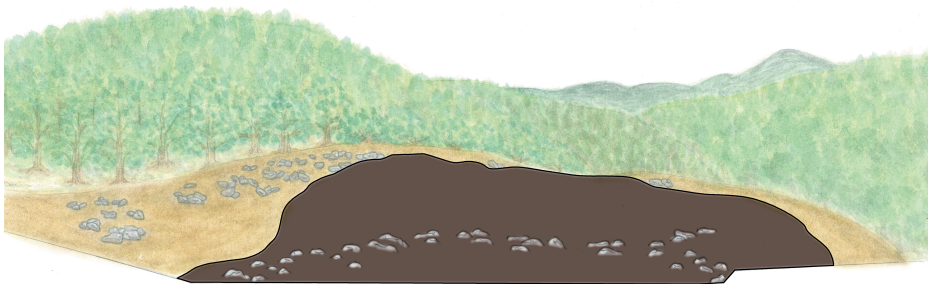
第9図 第8図の拡大



礫が完全に褐色の整地土で被覆される。

### 1. 整地層 1

年代：縄文時代晩期中葉、古墳時代中期、平安時代後半、或いは現代のいずれか



黒褐色の整地土で被覆される。礫の上部は見える状態であったか。

### 2. 整地層 2

年代：縄文時代後期前葉



集石遺構

配石遺構

配石、集石遺構の構築、掘立柱建物が構築される。

(\*掘立柱建物跡は、鹿角市大湯環状列石の復元建物を参考)

### 3. 配石、集石遺構他

年代：縄文時代後期初頭～前葉



竪穴住居跡の構築と廃棄。竪穴住居跡と同時期の土坑もみられる。住居の廃棄後は土坑群が構築される。

(\*当該期の住居跡は4棟であるが、同時に所在していた棟数は不明)

### 4. 住居跡群、土坑群他

年代：縄文時代後期初頭、土坑群の構築は初頭～前葉

(『西平内 I 遺跡発掘調査報告書』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 673 集の総括 (203・204 頁) を基に作成)

\*本図は、発掘調査を担当した濱田宏氏の確認を得て作成しています。 \*年代については、放射性炭素年代 (AMS 測定) の結果に基づく。



# 付 編

西平内 I 遺跡の自然科学分析

# 西平内 I 遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

## <目次>

はじめに .....	p.37
I . ボーリング調査 .....	p.37
1. 層相観察と試料 .....	p.37
1) 1 地点 .....	p.37
2) 2 地点 .....	p.37
3) 3 地点 .....	p.42
II . テフラ分析 .....	p.42
1. 試料 .....	p.42
2. 分析方法 .....	p.42
3. 結果 .....	p.42
1) 1 地点 .....	p.42
2) 2 地点 .....	p.43
3) 3 地点 .....	p.44
4. 考察 .....	p.44
引用文献 .....	p.47

## <図・表・図版一覧>

表 1. テフラ分析結果 .....	p.43
図 1. ボーリング地点概要 .....	p.38
図 2. 1 地点の模式柱状図、試料採取位置および分析層位 .....	p.39
図 3. 2 地点の模式柱状図、試料採取位置および分析層位 .....	p.40
図 4. 3 地点の模式柱状図、試料採取位置および分析層位 .....	p.41
図 5. テフラ分析結果からみた各地点の柱状図の対比 .....	p.45
図版 1 ボーリングコア写真 .....	p.48
図版 2 テフラ (1) .....	p.49
図版 3 テフラ (2) .....	p.50

## はじめに

西平内 I 遺跡は、岩手県九戸郡洋野町に所在し、渋谷川右岸の白前段丘川尻面（松山,2013）に立地する。平成 26・27 年度の発掘調査において、縄文時代後期初頭～前葉の配石遺構（環状列石や配石墓）、土坑などの遺構が確認されている。

今回の報告では、遺跡が立地する地形把握および年代資料の作成を目的として、ボーリング調査、テフラ分析を実施する。

### I. ボーリング調査

#### 1. 層相観察と試料

調査地点は、洋野町担当者との協議の上、環状列石と想定される範囲の中心付近（1 地点）、段丘の北側斜面中腹（2 地点）、段丘の北側斜面下部の沢状を呈する部分（3 地点）の 3 箇所を設定した。ボーリング地点概要を図 1 に示す。

ボーリング調査は、平成 30 年 4 月 19 日に弊社技師 3 名が現地に赴き実施した。以下に使用機材について記載する。

- ・ボーリング機材：大起理化学工業株式会社製 DIK-121E パーカッション式採土器（エンジン油圧式）
- ・コアチューブ：長さ 1m、直径 46mm

各地点、現地表面から 1m ごとに深度 3m までの 3 本のボーリングコアを採取した。採取した試料は、コアケースに収納し、弊社研究所に運搬した。

各地点の模式柱状図を図 2～4 に、ボーリングコアの写真を図版 1 に示す。以下、各地点ごとの観察結果を述べる。なお、各地点の対比については、次章でテフラ分析の結果も踏まえて検討する。

##### 1) 1 地点

深度 0～42cm までは赤黒～黒色の粘土質シルトからなり、現生の植物根を多く含む。下部は黒色を呈し、軽石粒を微量に含む。深度 42～53.5cm までは暗褐色粘土質シルトからなり、軽石粒を少量含む、下部では軽石粒がやや多くなる。深度 53.5～66cm までは褐色粘土質シルトからなり、最大径 3mm 程度の軽石粒を少量含む。なお、本層が平成 26・27 年度の発掘調査時に確認された褐色盛土層の可能性はある。深度 66～80cm は暗褐色粘土質シルトからなり、軽石粒を微量に含む。なお、本層が平成 26・27 年度の発掘調査時に確認された黒色盛土層の可能性はある。深度 80～93cm は褐色粘土質シルトからなり、最大径 2mm 程度の軽い試料を少量含む。深度 93～107.5cm は褐色軽石層からなり、上部は細粒～中粒砂サイズ、下部は中粒～粗粒砂サイズであり、上方に向かって細粒化する傾向が認められる。深度 107.5～167.5cm は黄褐色の砂質シルト～シルト質極細粒砂からなり、全体的に軽石粒を少量含む、部分的に軽石の濃集部が認められる。軽石などの含有状況から、火山灰由来の土壌の可能性はある。深度 167.5～300cm までは褐色粘土からなる。最上部に層厚 5mm 程度の黒色を呈する腐植の薄層を挟在する。

分析試料は、層相観察結果を考慮し、14 点（上位より試料番号 1～14）を採取した。試料採取位置を図 2 に示す。

##### 2) 2 地点

深度 0～57cm までは黒色粘土質シルトからなり、現生の植物根を多く含む。下部は、2～3mm の軽石粒を微量に含む。深度 57～84.5cm 暗褐色粘土質シルトからなり、2～3mm の軽石粒を少量含む。最下部は、軽石粒が微量になる。深度 84.5～134cm は褐色粘土質シルトからなり、部分的にやや暗色を示す。全体的に 2～3mm の軽石粒を中量含む。深度 134～142cm は褐色軽石層からなり、軽石は細粒～粗粒砂サイズである。明瞭な上方細粒化などは認められない。深度 142～202cm は黄褐色極細粒～細粒砂からなり、部分的に軽石の濃集部が認められる。1 地点と同様に、火山灰由来の土壌の可能性はある。深度 202～300cm は褐色粘土からなり、中部にやや

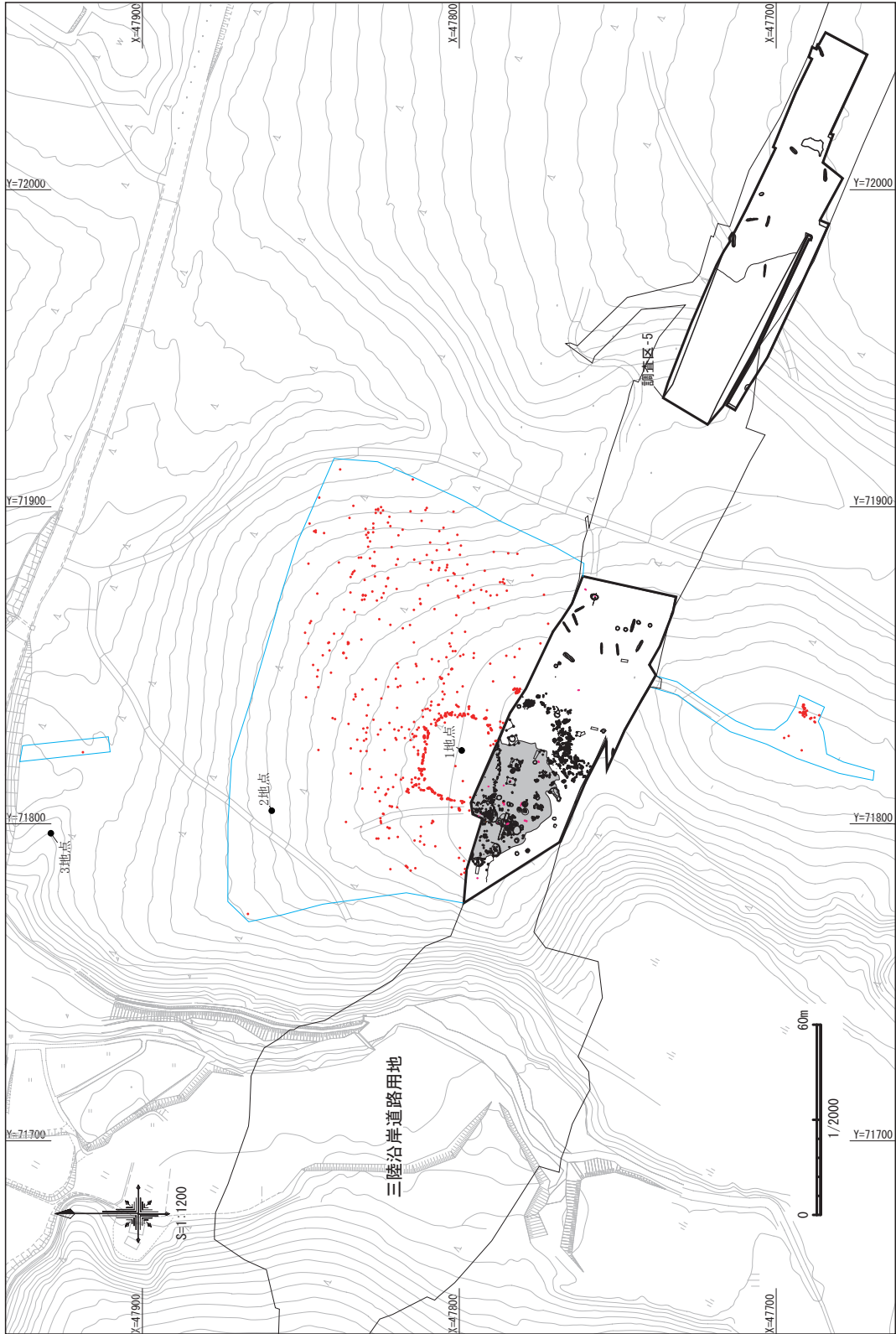


図 1. ボーリング地点概要

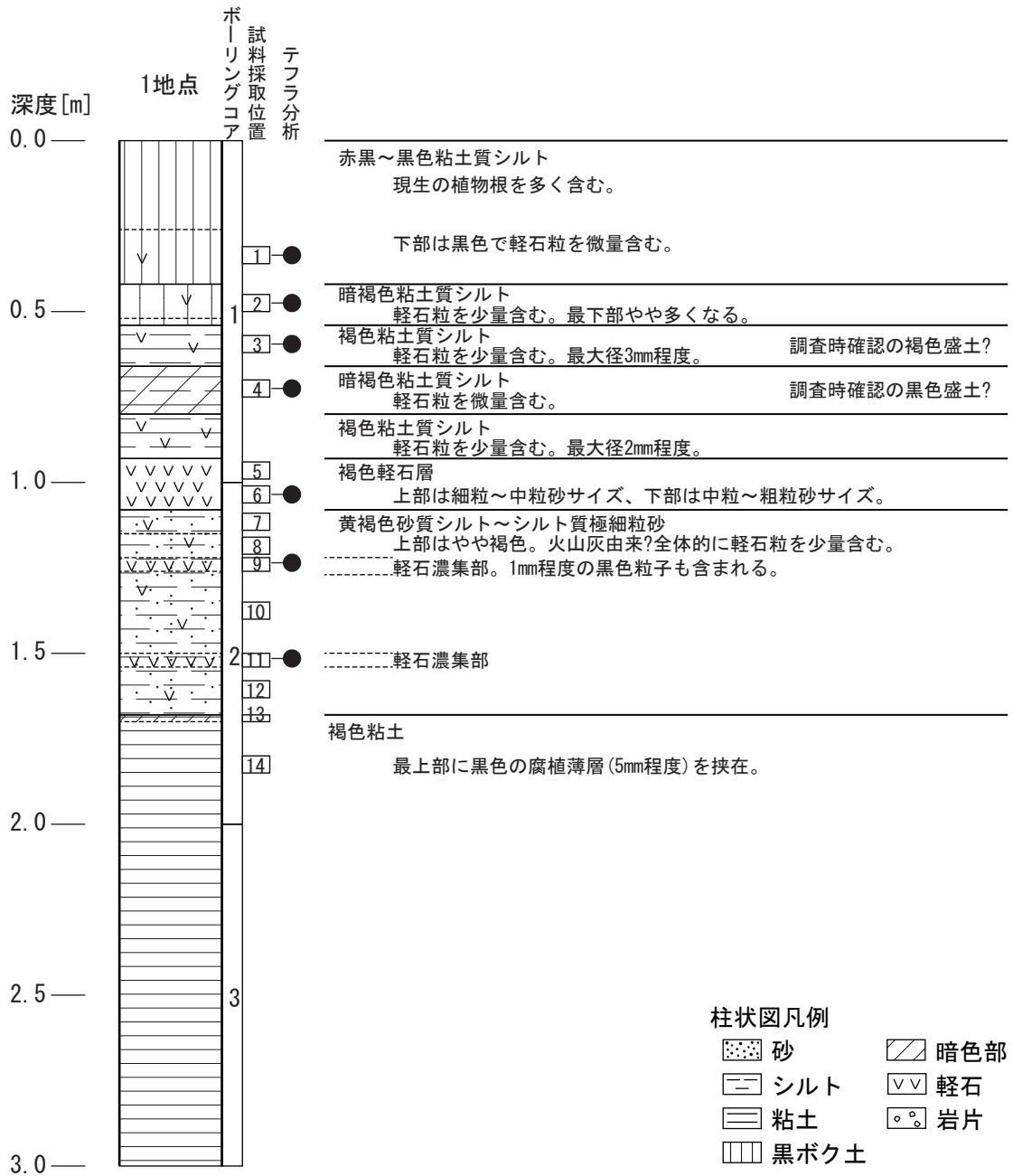


図2. 1地点の模式柱状図、試料採取位置および分析層位

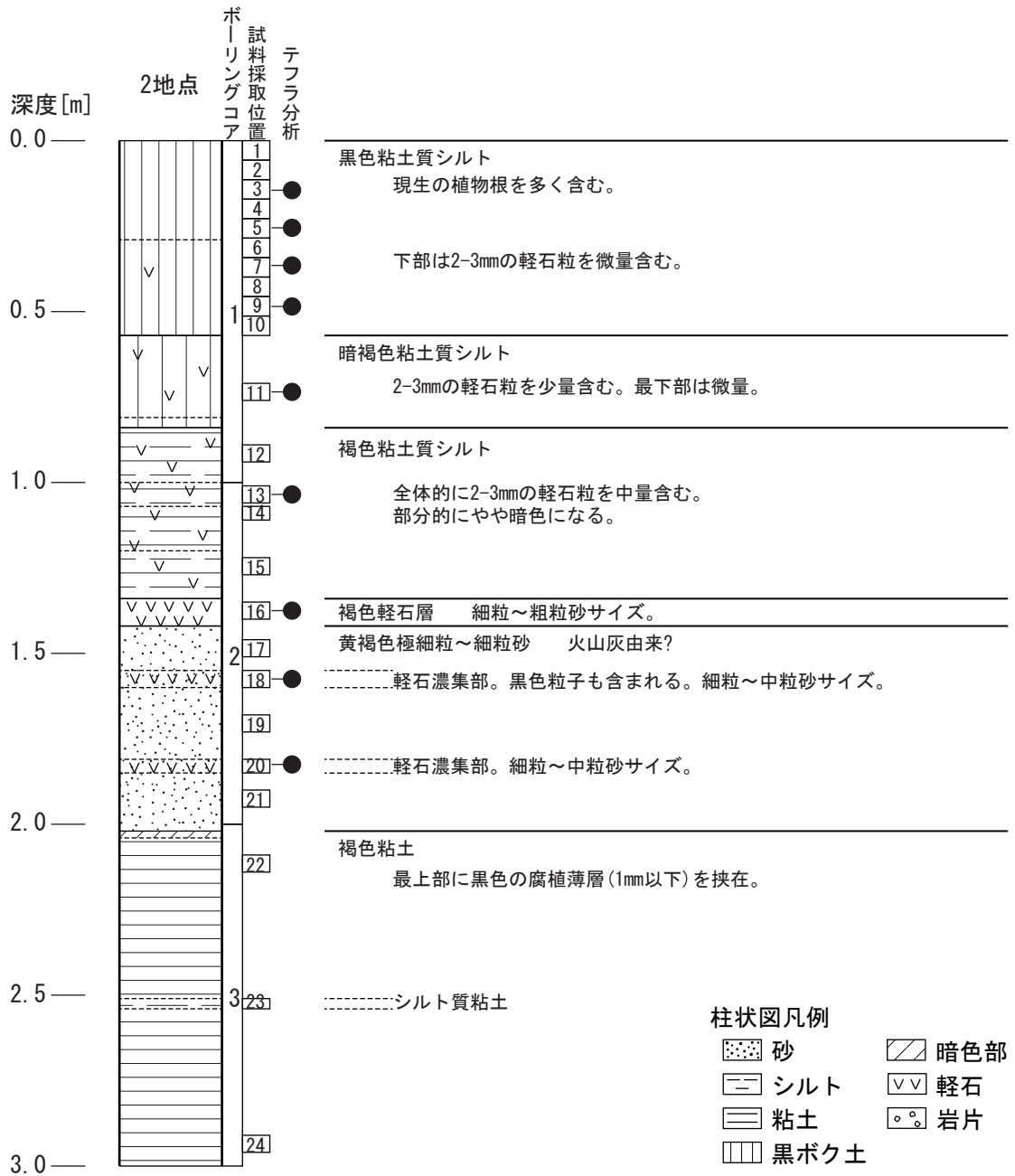


図3. 2地点の模式柱状図、試料採取位置および分析層位

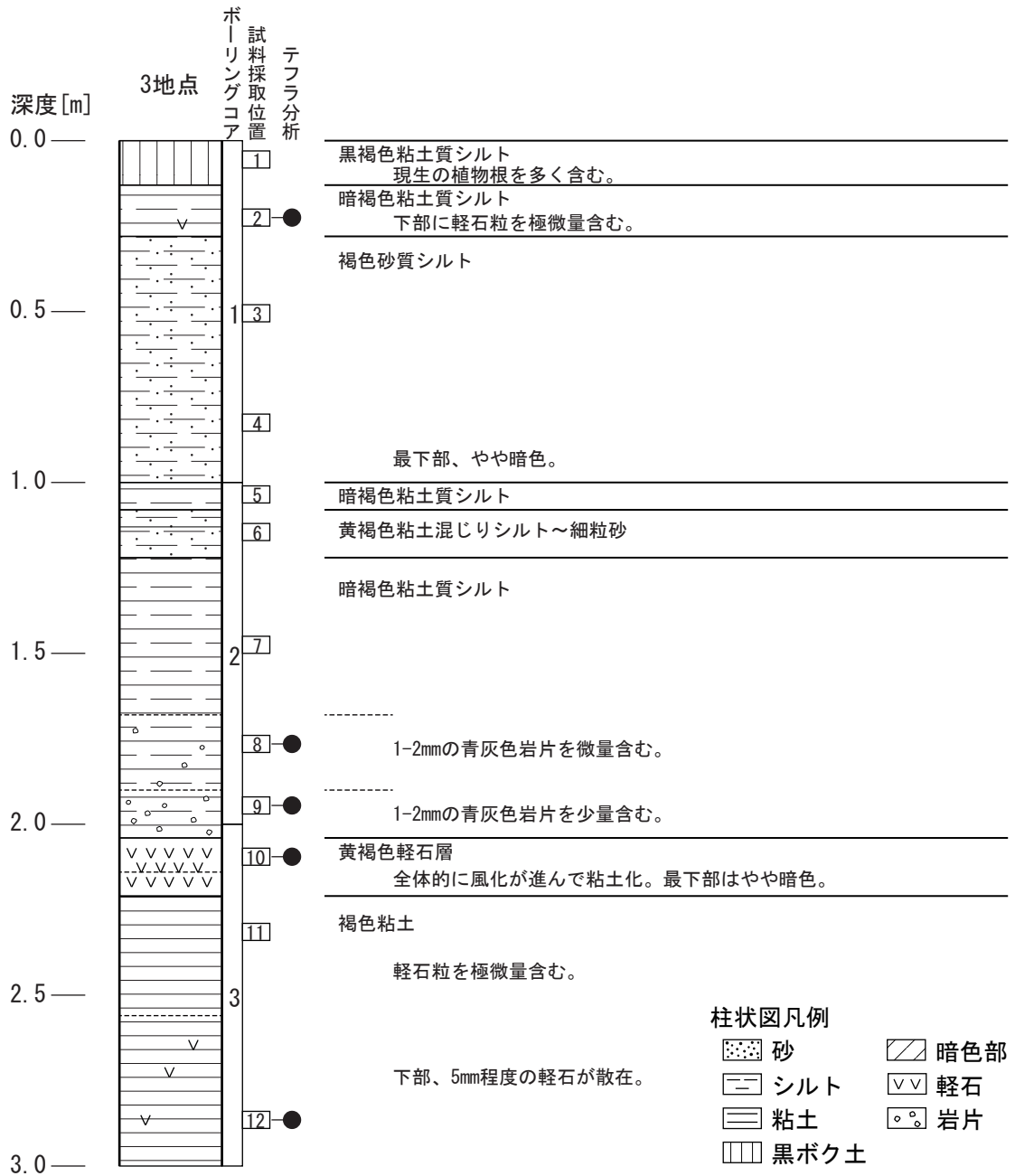


図4. 3地点の模式柱状図、試料採取位置および分析層位

シルト質を呈する部分が認められる。また、最上部に層厚 1mm 以下の黒色を呈する腐植の薄層を挟在する。

分析試料は、層相観察結果を考慮し、24 点(上位より試料番号 1～24)を採取した。試料採取位置を図 3 に示す。

### 3) 3 地点

深度 0～13cm は黒褐色粘土質シルトからなり、現生の植物根を多く含む。深度 13～27.5cm は暗褐色粘土質シルトからなり、下部に軽石粒を微量に含む。深度 27.5～100cm は褐色砂質シルトからなり、最下部はやや暗色になる。深度 100～108.5cm は暗褐色粘土質シルト、深度 108.5～122.5cm は黄褐色粘土混じりシルト～細粒砂からなる。深度 122.5～204.5cm は暗褐色の粘土質シルトからなり、下部に 1～2mm の青灰色を呈する岩片を微量～少量含む。深度 204.5～221cm は黄褐色軽石層からなり、全体的に風化が進んで粘土化している。最下部はやや暗色になる。深度 221～300cm は褐色粘土からなり、全体的に軽石粒を極微量含む。なお、下部には 5mm 程度の軽石も散在する。

分析試料は、層相観察結果を考慮し、12 点(上位より試料番号 1～12)を採取した。試料採取位置を図 4 に示す。

## II. テフラ分析

### 1. 試料

1 地点では、地表の黒ボク土層下部から褐色粘土層の上部まで、計 14 点を採取している。それらの中から、分析には試料番号 1～4、6、9、11 の計 7 点を選択した。試料番号 1、2 は黒ボク土層、試料番号 3、4 は縄文時代後期とされる盛土層、試料番号 6 は軽石層、試料番号 9、11 は軽石濃集部である。

2 地点では、地表の黒ボク土層上部から褐色粘土層の下部まで、計 24 点を採取している。それらの中から、分析には試料番号 3、5、7、9、11、13、16、18、20 の計 9 点を選択した。試料番号 3～11 は黒ボク土層、試料番号 13 は軽石を含む褐色粘土質シルト層、試料番号 16 は軽石層、試料番号 18、20 は軽石濃集部である。

3 地点では、地表の黒ボク土層から褐色粘土層下部まで、計 12 点を採取している。それらの中から、分析には試料番号 2、8、9、10、12 の計 5 点を選択した。試料番号 2 は黒ボク土層の下位の軽石を極めて微量含む暗褐色粘土質シルト層、試料番号 8、9 は岩片を微量～少量含む暗褐色粘土質シルト、試料番号 10 は粘土化した黄褐色軽石層である。試料番号 12 は軽石散在部である。

分析層位を、図 2～4 に併せて示す。

### 2. 分析方法

試料約 20g を蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の 3 タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破砕片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた繊維束状のものとする。

### 3. 結果

テフラ分析の結果を表 1 に示す。以下に各地点のテフラ分析結果を述べる。

#### 1) 1 地点

スコリアは、試料番号 4 以上の試料に極めて微量含まれる。スコリアの最大径は 1.3～1.5mm 程度であり、色調や発泡度などは試料間で大きな違いはない。いずれの試料にも黒色で発泡不良のスコリアが含まれ、他に暗褐色で発泡やや不良、赤色で発泡不良などのスコリアが混在する。



火山ガラスは、試料番号1～9までの6点には極めて微量含まれ、試料番号11には少量含まれる。試料番号1の火山ガラスには、無色透明の軽石型のほかに褐色や淡緑色を呈する軽石型も認められる。また、試料番号11の火山ガラスには、無色透明の軽石型のほかに極めて微量のバブル型火山ガラスも含まれる。

軽石は、軽石層の試料番号6および軽石濃集層の試料番号9と11からは多量検出され、黒ボク土層上部の試料番号1からは少量、盛土層下部の試料番号4からは微量、黒ボク土層下部の試料番号2と盛土層上部の試料番号3からは極めて微量検出された。試料番号6と9の軽石は、最大径8～9mmであり、白色で発泡良好またはやや良好、斜方輝石および角閃石の斑晶を包有する。試料番号11の軽石は、最大径約6mm、白色で発泡良好またはやや良好、斜方輝石の斑晶を包有する。試料番号2、3、4の軽石は、最大径2.5mm前後であり、白色で発泡良好またはやや良好の軽石と、灰白色で発泡やや不良の軽石が混在する。軽石に包有される斑晶は斜方輝石である。

## 2) 2地点

スコリアは、試料番号3～13の試料に微量または極めて微量含まれる。スコリアの最大径は1.0～1.8mm程度であり、色調や発泡度などは試料間で大きな違いはない。いずれの試料にも黒色で発泡不良のスコリアが含まれ、他に黒褐色で発泡不良、暗灰褐色で発泡不良、赤色で発泡不良などのスコリアが混在する。

火山ガラスは、試料番号3、16、20には少量、試料番号7、13、18には微量、試料番号5、9、11には極めて微量含まれる。試料番号3の火山ガラスには、無色透明の軽石型のほかに褐色や淡緑色を呈する軽石型も認められる。他の試料の火山ガラスは、いずれも無色透明の軽石型である。

軽石は、軽石層の試料番号16および軽石濃集層の試料番号18と20からは多量検出され、黒ボク土層の試料番号3～7、暗褐色粘土質シルト層の試料番号11および褐色粘土質シルト層の試料番号13の各試料からは少量、黒ボク土層中部の試料番号9からは極めて微量検出された。試料番号16と18の軽石は、最大径6～7mmであり、白色で発泡良好またはやや良好またはやや不良であり、斜方輝石および角閃石の斑晶を包有する。試料番号13

表1. テフラ分析結果

地点名	試料No.	スコリア			火山ガラス		軽石			由来するテフラ
		量	色調・発泡度	最大粒径	量	色調・形態	量	色調・発泡度, 斑晶	最大粒径	
1地点	1	(+)	B·b,B·sb,DBrG·sb	1.3	(+)	cl·pm,br·pm,gr·pm	++	W·g,W·sg, (opx)	2.5	To-a,To-Cu,To-Nk
	2	(+)	B·b,DBrG·sb,R·b	1.5	(+)	cl·pm	(+)	W·g,W·sg,GW·sb, (opx)	2.0	To-Cu,To-Nk
	3	(+)	B·b,DBrG·sb,R·b	1.5	(+)	cl·pm	(+)	W·g,W·sg,GW·sb, (opx)	2.7	To-Cu,To-Nk
	4	(+)	B·b,DBrG·sb	1.5	(+)	cl·pm	+	W·g,W·sg,GW·sb, (opx)	2.5	To-Cu,To-Nk
	6	-			(+)	cl·pm	++++	W·g,W·sg,W·sb, (opx,ho)	9.0	To-H
	9	-			(+)	cl·pm	++++	W·g,W·sg,W·sb, (opx,ho)	8.0	To-H
	11	-			++	cl·pm>>cl·bw	++++	W·g,W·sg, (opx)	5.8	To-BP2,To-Of
2地点	3	(+)	B·b,BBr·b,R·b	1.3	++	cl·pm,br·pm,gr·pm	++	W·g,W·sg,GW·sb, (opx)	3.6	To-a,To-Cu,To-Nk
	5	(+)	B·b,R·b	1.5	(+)	cl·pm	++	W·g,W·sg,GW·sb, (opx)	2.5	To-Cu,To-Nk
	7	+	B·b,BBr·b,R·b	1.2	+	cl·pm	++	W·g,W·sg,GW·sb, (opx)	2.3	To-Cu,To-Nk
	9	(+)	B·b,BBr·b,R·b	1.3	(+)	cl·pm	(+)	W·g,W·sg,GW·sb, (opx)	2.2	To-Cu,To-Nk
	11	+	B·b,B·sb,DGBr·b,R·b	1.8	(+)	cl·pm	++	W·g,W·sg, (opx)	3.2	To-Nb,To-Nk
	13	(+)	B·b,B·sb,DGBr·sb	1.0	+	cl·pm	++	W·g,W·sg,W·sb, (opx,ho)	3.5	To-H
	16	-			++	cl·pm	++++	W·g,W·sg,W·sb, (opx,ho)	7.0	To-H
	18	-			+	cl·pm	++++	W·g,W·sg,W·sb, (opx,ho)	6.0	To-H
	20	-			++	cl·pm	++++	W·g,W·sg, (opx)	13.0	To-BP2
3地点	2	(+)	B·b,BBr·sb	1.5	++	cl·pm	++	YW·g,YW·sg, (opx)	6.7	To
	8	+	GB·b,DGBr·sb,R·b	1.8	-		-			To
	9	-			-		-			
	10	-			-		-			
	12	-			-		-			

### 凡例

- : 含まれない, (+) : きわめて微量, + : 微量, ++ : 少量, +++ : 中量, ++++ : 多量.

B: 黒色, GB: 灰黒色, DGBr: 暗灰褐色, DBrG: 暗褐色, BBr: 黒褐色, R: 赤色, W: 白色, GW: 灰白色, YW: 黄白色.

g: 良好, sg: やや良好, sb: やや不良, b: 不良. 最大粒径は mm.

cl: 無色透明, br: 褐色, gr: 淡緑色, bw: バブル型, pm: 軽石型, opx: 斜方輝石, Ho: 角閃石.

To-a: 十和田 a テフラ, To-Cu: 十和田中郷テフラ, To-Nb: 十和田南部テフラ, To-Nk: 十和田二の倉テフラ, To-H: 十和田八戸テフラ,

To-H: 十和田ビスケット 2 テフラ, To-Of: 十和田大不動テフラ, To: 十和田カルデラ起源のテフラ.

の軽石は、最大径が 3.5mm であるが、色調や発泡度および包有斑晶鉱物の種類も試料番号 16 や 18 と同様である。試料番号 20 の軽石は、最大径約 13mm、白色で発泡良好またはやや良好であり、斜方輝石の斑晶を包有する。試料番号 11 の軽石は、最大径約 3.2mm、白色で発泡良好またはやや良好であり、斜方輝石の斑晶を包有する。試料番号 3～9 の軽石は、最大径 2.2～3.6mm であり、白色で発泡良好またはやや良好の軽石と灰白色で発泡やや不良の軽石が混在する。軽石に包有される斑晶は斜方輝石である。

### 3) 3 地点

スコリアは、試料番号 8 から微量、試料番号 2 からは極めて微量検出された。試料番号 8 のスコリアは、最大径約 1.8mm、灰黒色で発泡不良、暗灰褐色で発泡やや不良、赤色で発泡不良の各スコリアが混在する。試料番号 2 のスコリアは、最大径約 1.5mm、黒色で発泡不良、黒褐色で発泡やや不良のスコリアが混在する。

火山ガラスおよび軽石は、試料番号 2 からそれぞれ少量検出された。火山ガラスは無色透明の軽石型であり、軽石は最大径約 6.7mm、黄白色で発泡良好またはやや良好であり、斜方輝石の斑晶を包有する。コア試料の観察では軽石層とした試料番号 10 からは、スコリア、火山ガラス、軽石のいずれも検出されなかった。

## 4. 考察

西平内 I 遺跡は、十和田火山からほぼ真東におおよそ 70km 離れた位置にある。その地理的位置は、十和田火山を給源とするテフラの降下堆積物が多数分布する範囲内にある。今回の調査では、1 地点の試料番号 5、6 と 2 地点の試料番号 16 において降下軽石層と判断される堆積物が認められた（図 5）。この降下軽石層は、黒ボク土層の基底から 50cm ほどの下位に堆積することと、軽石の特徴、なかでも角閃石の斑晶を包有することから、十和田八戸テフラ（To-H:Hayakawa,1985）の降下軽石層に同定される。To-H を噴出した噴火活動は、現在みられる十和田カルデラを形成した最後の活動であり、その年代は暦年で 15,500 年前と考えられている（工藤,2008）。したがって、1 地点の試料番号 5、6 採取層位および 2 地点の試料番号 16 採取層位の年代は、暦年で 15,500 年前頃とすることができる。

なお、1 地点の試料番号 9 および 2 地点の試料番号 18 を採取した軽石濃集層を構成する軽石も、同地点上位にある軽石層の軽石と特徴が全く同様であることから、To-H に由来する軽石であると考えられる。ただし、その産状から、降下堆積層はいずれの地点も上位の軽石層の方であり、下位の軽石濃集層は、降下堆積後の土壤中における植物の根などによる下位への落ち込みみであると考えられる。一方、2 地点試料番号 13 に少量認められた軽石も、同地点試料番号 16 の軽石と同様の特徴を示すが、これは To-H の攪乱再堆積物であると考えられる。

1 地点の試料番号 11 と 2 地点の試料番号 20 にも軽石濃集層が認められたが、これらの試料の軽石は、上述した To-H 由来の軽石に比べて、発泡度やや不良の軽石を含まないことや角閃石の斑晶の包有が認められないことなどの違いがある。これらのことから、To-H とは異なるテフラに由来する可能性が高いと考えられる。To-H よりも下位にあることから、To-H の噴火活動以前に噴出したテフラに由来すると考えられるが、その対比の手がかりとしては、1 地点試料番号 11 の火山ガラスに極めて微量認められたバブル型火山ガラスをあげることができる。十和田火山を給源とするテフラのうち、バブル型火山ガラスを含むテフラには、暦年で約 3 万 2 千年前以前に噴出した十和田大不動テフラ（To-Of:Hayakawa,1985）が記載されている（町田・新井,2003）。1 地点試料番号 11 のバブル型火山ガラスは、To-Of に由来する火山ガラスの攪乱再堆積物である可能性が考えられるのである。すなわち、1 地点試料番号 11 の軽石の由来するテフラは、To-Of 噴出後 To-H 噴出前に噴出した十和田火山起源のテフラであると考えられる。町田・新井（2003）の記載に従えば、それに該当するテフラは、暦年で約 2 万年前に噴出したとされる十和田ビスケット 2 テフラ（To-BP2）とされる。したがって、1 地点試料番号 11 および 2 地点試料番号 20 の採取層位付近の年代は、約 2 万年前頃と考えることができる。

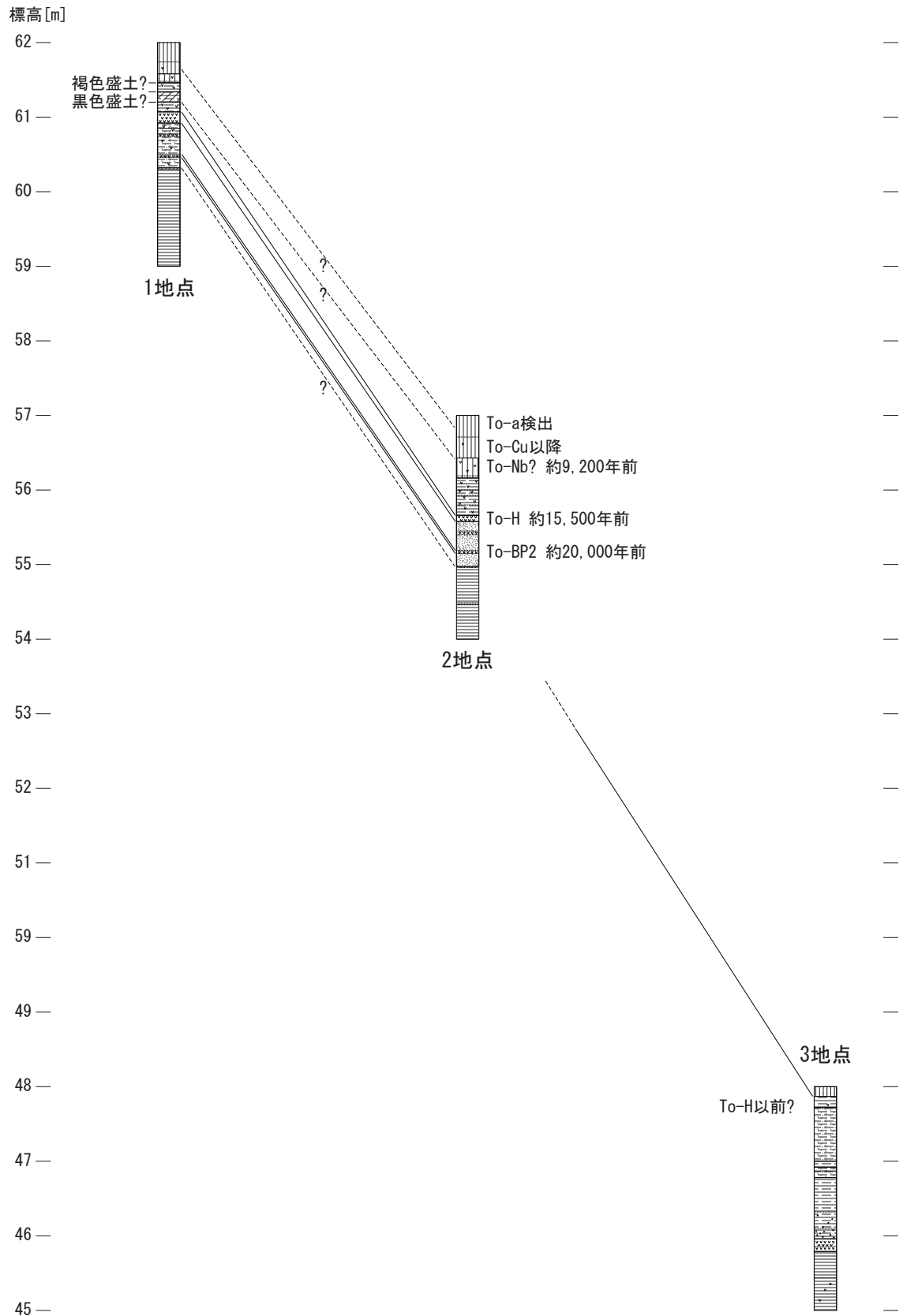


図5. テフラ分析結果からみた各地点の柱状図の対比

2 地点の黒ボク土層全層および To-H の上位の褐色粘土質シルト層では、微量または極めて微量のスコリアが検出されている。このスコリアは、その産出層位から、To-H の噴出による十和田カルデラ形成直後に始まり、その後の 4,000 年間におよぶ断続的な十和田火山の噴火活動で噴出した二ノ倉スコリア (To-Nk; Hayakawa,1985; 工藤・佐々木,2007) に由来すると考えられる。今回の産状からは、断続的な噴火活動とともに、スコリアが降下堆積後も長期にわたって攪乱再堆積を繰り返したことが推定される。

2 地点の黒ボク土層については、下部の試料番号 11 と中部の試料番号 7 以上で少量の軽石が検出されている。このうち、試料番号 11 の軽石は、発泡度がやや不良の軽石を含まないことや角閃石の斑晶を包有しないことから、下位の To-H とは別のテフラに由来すると考えられ、灰白色の軽石を含まないことから後述する上位の軽石の由来するテフラとも異なるテフラに由来すると考えられる。後述するように、上位の軽石の由来するテフラは To-Cu の可能性があることから、試料番号 11 の軽石の由来するテフラは、To-H 以降 To-Cu 以前の十和田火山起源のテフラであることが考えられる。これに該当するテフラは、1 万 1 千年前に噴出した新郷テフラかまたは 9,200 年前に噴出した南部テフラ (To-Nb) である (Hayakawa,1985; 工藤,2008)。Hayakawa (1985) に記載された両テフラの分布図では、新郷テフラの分布軸は真東よりやや北にずれた向きにあり、分布範囲も狭いのに対して、To-Nb の分布軸は真東よりやや南を向き、分布範囲も広い。本遺跡の地理的位置を考慮すると、2 地点試料番号 11 で検出された軽石は、To-Nb に由来する可能性が高いと考えられる。

2 地点の黒ボク土層中部試料番号 7 以上に少量含まれる軽石については、同様の特徴を示す軽石が、1 地点の縄文時代後期の盛土とされる層にも微量または極めて微量含まれている。このことから、2 地点試料番号 7 以上に含まれる軽石の由来するテフラは、縄文時代中期よりも前に噴出した十和田火山起源のテフラである可能性があると考えられる。これに該当する十和田火山起源の主要なテフラとしては、十和田中振テフラ (To-Cu; 早川,1983; Hayakawa,1985) をあげることができる。その噴出年代は、暦年で 6,100 年前とされている (工藤,2008)。この年代は、小林編 (2008) による縄文土器型式の年代観に従えば縄文時代前期後半に相当するから、縄文時代後期の盛土中に含まれることに矛盾はない。なお、2 地点における To-Cu の降灰層準は、試料番号 7 付近にあると考えられ、試料番号 9 の軽石は To-Cu の下位への拡散、試料番号 5 以上の軽石は To-Cu の上位への攪乱再堆積と考えられる。また、1 地点における To-Cu の降灰層準は、盛土の造成に伴い削平されている可能性がある。

さらに、2 地点の黒ボク土層上部の試料番号 3 には少量の火山ガラスが含まれ、その中に褐色や淡緑色を呈する軽石型火山ガラスが含まれることにも注目される。同様の火山ガラスは極めて微量ではあるが 1 地点の黒ボク土層上部の試料番号 1 にも認められている。このような特徴を持つ火山ガラスは、十和田火山起源のテフラの中では、平安時代の西暦 915 年に噴出した十和田 a テフラ (To-a; 町田ほか,1981; 早川・小山,1998) に含まれることが知られている。したがって、1 地点試料番号 1 および 2 地点試料番号 3 の軽石の中には、To-a に由来する軽石も含まれている可能性が高いと考えられる。ただし、両地点ともに、軽石の産状からは To-a の降灰層準を推定することはできない。

3 地点については、軽石層とされた試料番号 10 において分析処理後の砂分中に軽石を確認することはできなかった。ただし、処理後の砂分を構成する主な碎屑物は、自形を呈し、比較的新鮮な斜長石や斜方輝石および単斜輝石の鉱物片であった。これらはテフラに由来する遊離結晶であると考えられ、軽石層は、軽石質テフラの降下堆積層であると考えられる。おそらく、軽石は試料採取前の所見にあるように全て粘土化していたために、処理後の砂分には残存しなかったと考えられる。試料番号 10 の軽石層は、風化変質が進んでいることと、その層厚からみて、To-H などよりも古い十和田火山起源のテフラ層であると考えられるが、現時点ではそのテフラを特定することはできない。また、3 地点のコア試料上部を構成する褐色の砂質シルトについて、試料番号 3 の砂分を概査したところ、角閃石の鉱物片を認めることができなかった。このことから、コアの上部も To-H 降灰以前の土壌である可能性が高いと考えられる。したがって、試料番号 2 や 8 の採取された粘土質シルト層も、To-H

降灰以前の土壌である可能性が高く、それらの試料に認められたスコリアや火山ガラスおよび軽石については To-H 以前の古いテフラに由来する可能性が高いと考えられる。現時点ではそれらの古いテフラの対比はできない。今後の周辺域におけるテフラの産状を確認し、検討する必要がある。

#### <引用文献>

早川由紀夫,1983,十和田火山中礫テフラ層の分布、粒度組成、年代.火山第2集,28,263-273.

Hayakawa,Y.,1985,Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo,vol.60,507-592.

早川由紀夫・小山真人,1998,日本海をはさんで10世紀に相次いで起こった二つの大噴火の年月日-十和田湖と白頭山-.火山,43,403-407.

小林達雄編,2008,小林達雄先生古希記念企画 総覧 縄文土器.株式会社アム・プロモーション,1322p.

工藤 崇,2008,十和田火山エピソード E 及び G 噴出物の放射性炭素年代.火山,53,193-199.

工藤 崇・佐々木 寿,2007,十和田火山後カルデラ期噴出物の高精度噴火史編年.地学雑誌,116,653-663.

町田 洋・新井房夫,2003,新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.

町田 洋・新井房夫・森脇 広,1981,日本海を渡ってきたテフラ.科学,51,562-569.

松山 力,2013,平内Ⅱ遺跡の地学的環境.洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集 平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書 町有地整備事業に伴う遺跡発掘調査,洋野町教育委員会,14-20

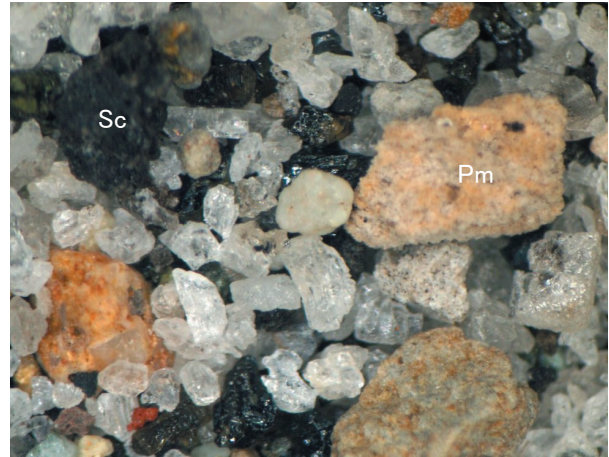
図版1 ボーリングコア写真



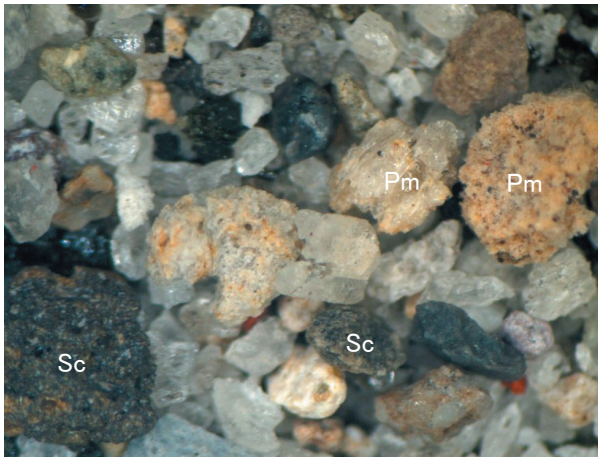
図版2 テフラ(1)



1.軽石・スコリア(1地点;1)



2.軽石・スコリア(1地点;3)



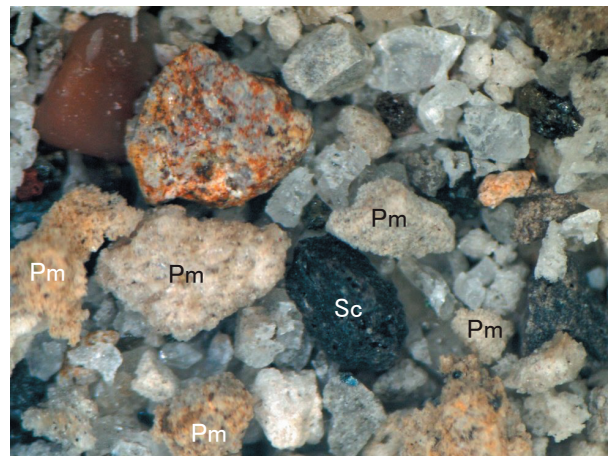
3.軽石・スコリア(1地点;4)



4.To-Hの軽石(1地点;6)



5.To-BP2の軽石(1地点;11)

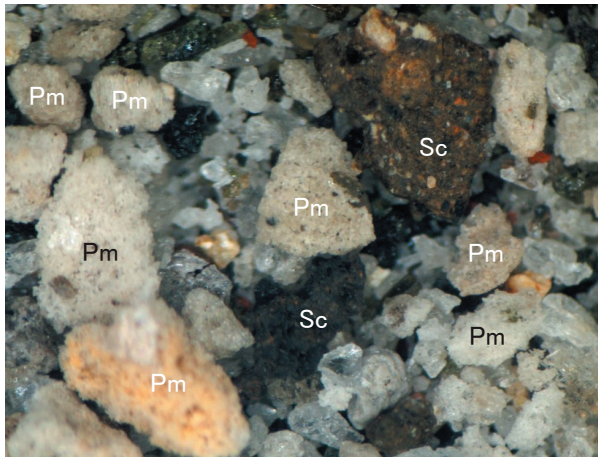


6.軽石・スコリア(2地点;5)

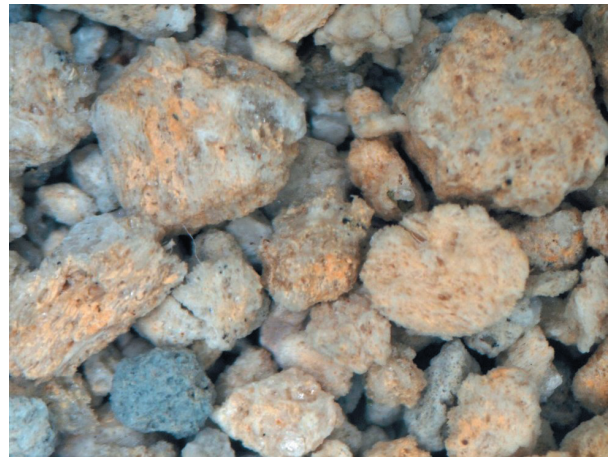
Pm:軽石. Sc:スコリア.

2.0mm	1.0mm	2.0mm
1,6	2,3	4,5

図版3 テフラ(2)



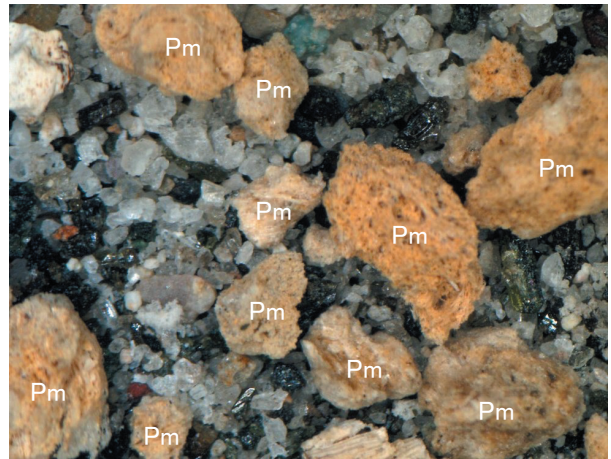
7.軽石・スコリア(2地点;11)



8.To-Hの軽石(2地点;16)



9.To-BP2の軽石(2地点;20)



10.軽石(3地点;2)

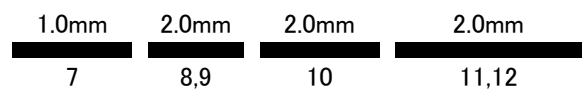


11.砂分の状況(3地点;9)

Pm:軽石. Sc:スコリア.



12.砂分の状況(3地点;10)





# 写 真 图 版



遺跡遠景（上が北）



遺跡近景（上が北）

©岩手県河川課提供資料

写真図版 1 遺跡遠景・近景



調査区近景（西より）



地中の礫の確認状況（北より）



地中の礫の確認状況（南より）



地中の礫の確認状況（西より）



地中の礫の確認状況（手前の杭は弧状の石列が所在した跡）



地中の礫（集石）の確認状況（西より）



ボーリング調査作業の様子



礫の座標点測量の様子

写真図版 2 調査区近景他

## 報告書抄録

ふりがな	にしひらないいちいせきはんどぼーりんぐちょうさほうこくしょ							
書名	西平内I遺跡ハンドボーリング調査報告書							
副書名	配石、集石遺構の地中確認調査							
巻次								
シリーズ名	洋野町埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編著者名	千田政博							
編集機関	洋野町教育委員会							
所在地	〒028-7914 岩手県九戸郡洋野町種市23-27 TEL 0194-65-2111							
発行年月日	2019年3月18日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° ' "	東経 ° ' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
にしひらないい 西平内I遺 せき 跡	いわてけんくのへ 岩手県九戸 ぐんひろのちょうたね 郡洋野町種 いちだいちわり 市第37地割 ちない 地内	03507	IF48-0041	39° 31' 23"	141° 55' 44"	20160829 ～ 20160923	11,954m <sup>2</sup>	弧状の石列 の形状と規 模の確認、 また、集石 遺構の位置 と範囲確認 のためのハ ンドボーリ ング調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
西平内I遺跡	散布地	縄文時代 弥生時代	竪穴住居跡 竪穴状遺構 掘立柱建物跡 陥し穴状遺構 土坑 焼土遺構 炉跡 埋設土器 柱穴 配石遺構 集石遺構 整地層	縄文土器 弥生土器 石器 土製品 石製品				

---

洋野町埋蔵文化財調査報告書第4集

## 西平内 I 遺跡ハンドボーリング調査報告書

配石、集石遺構の地中確認調査

印刷 平成 31 年 3 月 13 日

発行 平成 31 年 3 月 18 日

発行 洋野町教育委員会  
〒 028-7914 岩手県九戸郡洋野町種市 23 - 27  
TEL (0194) 65-2111

印刷 大東印刷株式会社  
〒 039-1103 青森県八戸市長苗代字内舟渡 102 - 14  
TEL (0178) 28-2348

---